アッシュ戦記

神名　義心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アッシュ戦記

【Ｎコード】
Ｎ８０２１Ｓ

【作者名】
神名　義心

【あらすじ】
私は母を殺した５人の法外の貴族と呼ばれる犯罪者たちに復讐を誓った。これはその復讐劇である。毎朝１０時更新！！ガンバリマス！！

序（前書き）

アッシュ・クロフォードは母の仇の5人ガルド・イニエーブ、グライア・シンシア、バルド・ゲール・アラン、シャルレ・ガージマス、イポニチェ・ゴルディーザに復讐をするべく立ちあがった。

序

深い感情が横たわっていた。それはまるで地中一面に張り巡らされた電線のように私の根っこに浸透していた。いつ頃から私にその真っ黒な感覚が芽生えたのかは、はっきりしている。あれは、ただ一人の肉親であった母が無残にも稀代の犯罪者たちによって命を奪われた日だ。

そして、その首謀者5人はまだ生きている。彼らは法の及ばない存在<法外の五貴族(アシュランテ)>と呼ばれ、政治的もしくは力的関係において、警察や軍隊も手出しできない存在だったからだ。ガルド・イニエーブ、グライア・シンシア、バルド・ゲール・アラン、シャルレ・ガージマス、イポニチェ・ゴルディーザ。私は新聞や雑誌でこの名前を見ると、一日どうしようもない殺意と冷徹さを持った人間に生まれ変わる。私は母を失ってから、親戚の家で肩身の狭い暮らしをしながらも、彼らの名前を忘れたことはなかった。正確にいうと、私と母が巻き込まれた事件<秋の大殺戮(オータム・バルバロッサ)>のことを聞かされたのは育ての親ともいうべき、ガルザニ叔父からであった。15歳の誕生日の日だった。私は叔父に皆が寝静まった後に呼ばれ、テーブルについた。そこで、母のことを覚えているか?と問われた。私はもちろん覚えていた。当時10歳だった私は記憶するには十分すぎる衝撃の光景があった。けたたましい爆発音と銃声が響く中で母に手を引かれ私たちは逃げまどっていた。一介の市民にはその時何が起こっているのかわかるはずもなかった。ただ、何故か戦いが始まり、何故か人が死んでいった。まもなく母も凶弾に倒れた。私は母の身体のぬくもりが消えていくまで、ずっと母にすがって泣いていた。そして、いつの間にか泣きつかれて、寝てしまっていた。気付いた時には戦いは終わり、母の冷たい亡骸がそこにはあるだけだった。かくして、私は秋の大殺戮(オータム・バルバロッサ)の数少ない生き残りとなった。ガルザニ叔

父は私がそのことを告げると、法外（アシュランテ）の五貴族のことを私に教えた。私は復讐を誓った。だが、彼らの素性は謎に包まれていた。誰もが復讐を恐れて、口を閉ざしていた。ただ、犯罪を犯す時、彼らの悪業は大体的に宣伝されるのだった。私はその記事を頼りに、五貴族のことを調べまわった。そして、いつの日か彼らを法の下に引っ張り出して裁きを受けさせたいと思っていた。さらに、もし叶わなければ自らの手で復讐を決行するつもりであった。上級大学に進んだ私は法外（アシュランテ）の五貴族についての研究をしているふうを装って、ついに一人の手がかりを得た。ガルド・イニエーブだ。　これから、このイニエーブとの熾烈な戦いを語りたいと思う。かくして２６の夏、私の復讐劇は始まった。

序（後書き）

あらすじみたいな文章になってもうた><；

一章ガルド・イニエーブ<1>

ガルド・イニエーブは法外の五貴族の中でもっとも謎に包まれている。だが、真偽はさておき、もっとも情報が人々の口からもたらされるのが彼だった。これには、わざと情報をもらし、人が口々に噂するのを喜んでいるという自己顕示欲の塊であるとか様々な説がある。謎によって彼は法外の五貴族の仲間入りをした。彼は素性が知れないという一点によって、国家警察の逮捕を免れてきたのだ。グライア・シンシアのような、絶大な権力やバルド・ゲール・アランのような知略もなく、シャルレ・ガージマスのような狂気ももっておらず、イポニチェ・ゴルディーザのように畏怖される存在でもなかった。即ち、彼には何の後ろ盾もなかった。それでも、史上稀にみる法外の五貴族の一員と呼ばれるようになったのは、変装術であるといわれている。彼はいわば、多くの人間に成りすますことで、数々の悪行を重ねてきた。中でも有名なのは。世界に並び立つ2大国、ゲルマンとアーリア帝国の首脳会談の際、ゲルマンの統領、グニア・レンズブルクに成りすましていたといわれる。ゲルマンの英雄、ニーチェリアによって企みは露見したが、あと一歩で全面戦争かというほどに両国の関係は悪化していた。そして、ニーチェリアも彼を捕らえることはできなかったのだ。本編の主人公である私、アッシュ・クロフォードは既に退役していた英雄ニーチェリアと会う機会をもつことを目指した。そしてある日それは実現した。

前日にゲルマンの首都アルベリンにあるベアトリーチェ空港に降り立った。ホテルに一泊し、理路整然と並んだ建築物に目を奪われた私は束の間の異国情緒を感じたが、すぐに本来の目的を思い出した。そう、ガルド・イニエーブの手がかりを求めて、ゲルマンの英雄ニーチェリアと会う約束をしていたのだった。もっとも、英雄とはいっても、名声などは忘れ去られるのが早い国なのか、ニーチェ

リアの家はごく普通の一軒家であった。私を迎えニーチェリアは白髪の髭を伸ばした老紳士だった。そして、目には力ともいうべき光が確かに宿っているようだ。鋭い眼光でみつめられると一介の学生である私は緊張してしまった。彼はイニエーブについて話したくてたまらないようだった。

「さっそくですが、ニーチェリアさん。ガルド・イニエーブについて聞きたいのですが」

「もちろん。いいとも。アッシュ君。しかし、君も奇妙なことに興味を持つのだね。法外の五貴族の研究なんて一文にもなりはしないだろうに」

私は少しムッときた。が、相手を怒らせないように慎重に言葉を選んだ。

「たしかに、一文にもなりません。しかし、興味があるのです。それでさっそくですが、貴国の統領になりすました事件。なんとこちらでは呼ばれているのでしたかね、それについてお聞きしたいのですが」

ニーチェリアは自分の知識をひけらかすように笑っていった。

「ああ。グニア事件でいいよ。こちらでも様々な呼びかたがある。だが、この国では誰もあまり語りたがらない。なんといっても、わが国の誰もが気付いていなかった一国の長のすりかわりだからね。いわば、恥な事件とでもいうべきであろうか。わが国民は極めてプライドの高い民族だからね。私も含めてね。君は私に感謝しなければならないよ。もちろん、君の熱意に負けたのだがね。君ときたら、一年間に３００通もの手紙をよこすのだからね」

「その節は失礼しました大佐。しかし、どうしても、ガルド・イニエーブと直接会ったことのある人と話がしたくて」

大佐と私が言ったことで、気を良くしたのか彼はますます饒舌になった。

一章ガルド・イニエーブ<2>

「いいだろう。グニア事件の話をしてやろう。まず私が知っているのは彼の情報収集能力の高さだな。本来なら機密にもなるだろう統領の癖にいたるまでを詳細に調べて演じていたのだからな。そして、奇怪なのは彼がいつ統領と入れ替わったのか今をもってしても謎ということだ。国の中にイニエーブの協力者が潜んでいたのだろう。ということになっているが、どうも腑に落ちないのだよ」

私はニーチェリア元大佐の長いお喋りに幾分うんざりしながら、辛抱強く有益な情報を聞き出すチャンスを待っていた。そして、話がひと段落した時、すかさず訊ねた。

「ガルド・イニエーブとわかったのは何故ですか？」

彼は話しに水を差されて不機嫌そうに眉をしかめたが、少し考えて、答えた。

「それは簡単だ。グニア様の死体が見つかったからだ。顔を潰された痛ましいものだった」

「顔を潰されたのに何故彼と？」

「我が国では警察によって全ての人間の指紋がデータバンクに入れられているのだよ。もちろん、グニア様も例外でなくね」

「なるほど、それでは、偽者が何故ガルド・イニエーブだと？」

「グニア様とまったく同じ指紋をもっていたからだ。そして、ばれるやいなや、消えて犯行声明を出したのだ。我が国では最先端技術によって、指紋の認証が公的なあらゆる場で使われている。統領府も例外でなくね」

彼は最後にそう言うのが口癖のようだった。まあそんなことはどうでもいい。つまり、ガルド・イニエーブは指紋にいたるまで、グニア氏の個人情報をいつの間にか盗んでいたのだ。そして、それほど用意周到にしておきながら、何故死体の指紋はそのまま残しておいたのか・・・・・・。ここに私は違和感を覚えた。単なるイニエ

ーブのミスなのかもしれないが、とても世界の2大国を動かそうというほどの野望のわりには随分とお粗末な結果だったということだ。彼の目的はもしかして別にあったのではないか。私はそう考えた。しかし、何の確証もなかった。

「それで、イニエーブは指紋をどこで変えたのでしょうか？わかっていますか？そして、機械を欺くほどに指紋を変えることは可能でしょうか？」

私はさらに続けた。元大佐は立ち上がると、窓のほうを見ながら私に背を向けると言った。

「蛇の道は蛇に聞けということわざが我が国にはあってね。わが国ではもちろん指紋を変えるのは違法だ。しかし、別の指紋に変えることは可能なようだね。その瞬間もちろんゲルマンの国民でなくなるのだがね。すすんでそんなことするものがいないわけではないようだ。そして、さすらいの指紋師といわれる男がいるらしい。」

「その男の名前はわかりますか？」

「なんでも、アルバタール・フィンガーマークと名乗っているそうだ。わが国でも全力で探したが何しろこの国の人間ではないようでね。しかし、君が指紋を変えたいといえば向こうから寄ってくるかもしれないね。しかし、それには莫大な金がいるだろう」

「わかりました。ありがとう。大佐。感謝します」

私はこうして大佐と別れた。次はいかにして金持ちを装い、フィンガーマークと如何に接触するかであった。

一章ガルド・イニエーブ<3>

お金は当然もっていなかったので、故郷に戻った私はガルザニ叔父に相談することにした。ガルザニ叔父の家、つまり私の青春時代を過ごしたトールキアという町にある石造りの家の前にくると、従妹のサニチェエートが気づいて、私に駆け寄って来た。

「アッシュ兄さん。お帰りなさい。来るという手紙をもらって待っていました」

十分魅力的な若い笑顔は一時、復讐を忘れさせたが、立ち止まっている暇はなかった。サニチェエートに挨拶もそこそこに、叔父の待つ家へと入った。ガルザニ叔父はいつものような暖かい笑顔で私を迎えてくれた。

「アッシュ。まあゆっくりしていけ」

叔父の言葉はもちろんありがたかったが、私に時間はない。単刀直入に切り出した。

「叔父さん。どうしてもお金がいるんだ。どうにかして、お金を得る方法はないだろうか？

」

叔父は煙草を軽くふかすと、心配そうに私を見た。

「お前が、大学で法外の五貴族について調べているのは知っている。確かに、秋の大殺戮にはやつらが関わっているのは周知の事実だ。お前もそれは知っているだろう。だが、復讐を考えるなど馬鹿げたことだ。もっと自分の幸せを考えてはくれないか」

叔父は私の内面を驚くほど理解していた。だが、私の信念の固さは理解していないようだった。必ず母の復讐を果たして初めて母は安らかに眠れるのだ。揺るぎない意志でいたが、叔父を心配させるのは本意ではなかったので、努めて明るく言った。

「叔父さん。僕は復讐なんて考えていませんよ。安心してください。たしかに、彼らが憎い。そして、彼らの研究をしていることも事実

です。しかし、自分の身や叔父さんの家族、いや僕の家族も同然の人たちを危険にさらすことはないです。投資をしようと思いましてね」
壮年の叔父は幾分安心したように、
「それならば私が保証人になって、お金を借りてあげよう。いくらほどだね」
「助かります。１００万マルセルほど」
マルセルはアーリア帝国の貨幣単位で、ゲルマンのマルクと並んで国際通貨となっていた。決して、この金額で足りるとは思わなかったが、私はこれを元手に増やすしかなかった。叔父はアルベルト銀行の友人から借りてあげようと、言って、一週間後に私の口座に振り込んでくれることになった。帰り際、サニチェエートがまた門の所で待っていた。
「お気をつけて」
私は妹のように思っている彼女を危険にさらさないと自らに誓いながら、この家には事が終わるまで2度と近づかない覚悟であった。それだけに、私は彼女の眼をじっと見て、
「ありがとう。健康に気をつけて」
と言って家をあとにした。彼女は悲しげに、そして幾分私を哀れむように見送ってくれた。

それからの一週間私は自分の下宿でお金を増やすための投資の準備をし、またガルド・イニエーブのグニア事件での犯行声明を過去の新聞から探し見つけた。
その文とはこうだった。

一章ガルド・イニエーブ＜４＞

親愛なるゲルマン国民に告ぐ。私、ガルド・イニエーブは諸君らの無知蒙昧な国家に対する信頼を明らかにすべく、今回の犯行を行った。法外の五貴族にとってみれば、一国のトップを冷たい亡骸にし、なおかつ、なりすますといったことは容易いことなのだ。諸君らは、普段から自分たち以上の国はないと思い驕っているだろうが、法外の五貴族にかかれば、国さえも思いのままということだ。これにこりて、私を捕まえようなどと馬鹿げたことは以後控えるがいい。

―ガルド・イニエーブ―

これは、ある意味彼らしいともいえるが、本当に何の利害もなく、このような危険なことをするものだろうか？私はまたもや引っ掛かった。一歩間違えば、これはゲルマンという国を根底から敵に回す危険もはらんでいたのだ。現状はたしかに、ガルド・イニエーブとゲルマン国は敵対関係にあるわけではないので、彼のもくろみは成功したといえる。だが、どうしてもそれだけに思えなかった私はイニエーブが統領とすりかわったと疑われるだろう時期から可能な限り、統領グニアの出した命令を詳細に調べてみた。すると、ある新聞の一記事に、『グニア統領、行方不明者の指紋データの消去を命じる』とあった。ガルド・イニエーブの指紋の件を聞かされていた私にはこの記事が気になってしょうがなかった。表向きは近年の人口増加によるデータの膨大化によって、記憶装置の負担を減らすためとあった。しかし、行方不明者はゲルマンの人口およそ一億に対して、わずか１０万人であった。私は何かしら気になりながらも、投資の準備に次の日から忙しくなったので、それ以上調査はできなかった。投資の方法は手早く言えば詐欺の一種だった。世界中から、資金を集め、集めた資金の一部を配当し、どんどん無限に拡大させていく。私の計算によればこの方法を使えばおよそ、露見するまで

に１０年。つまり私に残された時間は１０年だった。その間に金は入り続けるのだ。当然逮捕や重罪は免れないが、私はわが身を犠牲にしても、法外の五貴族への復讐の念は強かった。

さっそく私、アッシュ・クロフォードは実体のないダミー会社を作り上げ、資金集めに奔走する有能な人材を雇った。法外の五貴族の研究を行っていたせいもあって、こういう裏稼業にはかなり詳しくなっていた。こうして準備は整った。私は新聞に広告を出した。

『私はある理由があって、指紋を変えたいのです。お金に糸目はつけません。連絡ください。０×〇－４５３５－▲△▽▼　ビルグ・オノエーブラ』

法外の五貴族に私の身元を知られないように偽名も買った。あとは指紋師アルバタール・フィンガーマークが喰いつくのを待つだけだった。もし違ってもイニエーブの指紋を変えた人間を見つければいいだけだ。他人の指紋をそっくり写しかえるなどという神業はできて、数人だろうと思っていた。もし、本当にできる人間がいるのならばだが・・・・・。

一章ガルド・イニエーブ<5>

一週間後、偽名であるビルグ・オノエーブラ宛ての電話は３０件来ていた。半分冷やかしのようなものもあったが、あとは有名な整形外科医などの本物の電話もあった。私は人を雇ってその内容をレポートにして書き出させた。そしてある一件に私は目がひかれた。そこには、指紋を消すだけでなく、指紋をそっくりうつしかえることができると書かれていた。そして、その電話をしてきた相手はアルバタール・フィンガーマークだった。私は確かな手ごたえと同時にあまりにもうまくいきすぎていることで不安を覚えた。だが、とりあえず、会ってみることにした。何回か手紙を往復した後、私は世界中のセレブたちの保養地になっていた神秘の国サルガッソーの高級ホテルで彼を待った。もちろん高級ブランドの服に身を包み、靴、髪形、流行までセレブのようにふるまうことが私に課せられた。自分は金を持っていると相手に思わせることが重要だった。そして、現れた男は東方の人らしく背の低い、浅黒い肌をしていた。

「ビルグさんですか？私はフィンガーマークの代理人でサムというものです。あなたが、国際語であるジャスール語がお出来になるということで、私が選ばれました」

ビルグと呼ばれた私、アッシュ・クロフォードはフィンガーマーク本人が出てこなかったのを残念に思った。そして、ジャスール語というのはアーリア帝国の言語で、私がもっとも得意とする国際公用語である。どうやら、フィンガーマークはジャスール語ができないらしかった。私は気を取り直して喋りだした。

「はい。ビルグといいます。私は様々な享楽をむさぼってきたのですがね。他人になりすますという最高のスリルは味わえていないことに気付いたのです。フィンガーマーク氏は何でも他人の指紋をうつせると聞きましたが、本当ですか？」

サムは満面の笑みを浮かべて、

「はい。私の主人にかかればそのようなことは可能です。ただし、それを行うには手が必要です。残酷な話ですがね。生死は問いません。両手がいいですね。それは御自分で用意していただかないと」
「わかります。それはごもっともです。しかし、サムさん。本当に可能だという証拠をこちらもみせてもらわなければなりません。そうでなければ死体にしろ、手を準備するということはリスクが高すぎる」
私は静かにしかし、力をこめてささやいた。サムはそのような言葉も想定内といった様子で、ささやき返した。
「あなたが指紋まで変えたいということは、相手はゲルマン国の人なのでしょう？実は、統領グニアの成りすまし事件ご存知ですか？あれはうちの主人も一枚かんでましてね」
「ということは、フィンガーマーク氏はあの、ガルド・イニエーブにあったことがあると？」
私は一層、声を潜めてサムに顔を近づけた。サムも顔を近づけて、やはり小声で言う。
「ビルグさん。その名前だけは出しちゃいけません。法外の五貴族の怖さはむしろあなた方よりも法外の人間こそ、知っているのですよ」
サムの顔には怯えの色が濃く漂っている。なるほど、と私は思った。とにかく、この男は何か知っていると確信した。そして、前もって準備しておいた超小型のゲルマン製の発信器を自分のコップの中に入れると、セレブの間で流行っていた親愛の証として口をつけたコップの飲み物を相手に半分飲ませるという行為をするふうを装って、サムに超小型発信器を飲ませた。
「では、また後日話あいましょう」
こういって私とサムはがっちりと握手をして別れた。私はサムの体内から出る発信器の電波を頼りに追跡を開始した。

一章ガルド・イニエーブ＜6＞

最初、追跡は順調だったが、発信器が体内にとどまる時間までに、相手の居所を掴まなければならないという焦りもあった。サムの信号はサルガッソーのある別荘地帯まで来ると、動かなくなった。高級別荘地は一軒が広い敷地を持っているので、サムのとどまっている別荘地の番地はすぐにわかった。その辺りを散歩をするように、歩いたが、門以外の壁の上部には有刺鉄線が張りめぐらされていた。さて、どうしたものか、と思案に暮れていると、ふいに声をかけられた。

「何をしているのだね。若いの」

人相の悪い、男がこっちを見て聞いてきた。

「いやあ、散歩をしていたら道に迷ってしまってね」

私は平然として言うと、男は低い声で脅かした。

「ここはアルバタール・ギンガジザス様のお屋敷だ。用がないならさっさと帰れ」

アルバタールという名前はフィンガーマーク氏の名前と一致する。私はまたもや、何か仕組まれたような作為を感じたが、逆にいえばこれは情報を聞き出すチャンスでもあった。

「ギンガジザス様？何をしている方だね？私は鉄鋼王デニス・オノエーブラの四男ビルグ・オノエーブラだ」

私は早速この偽名の効果を確かめる機会を得た。アーリア帝国の鉄鋼産業界の巨人オノエーブラ家を簡単にあしらうわけにはいくまい。案の定、男は慣れていない作り笑顔で、

「そうでしたか。そうとは知らずに申し訳ありません。私は実は、ここの屋敷に雇われているラビンというものでして、以後お見知りおきを」

と精一杯媚を売った。小物とはこうしたものだ、と私は思った。同時にアッシュ・クロフォードという本名でなくて良かったと思っ

た。偽名とは不思議と違った自分を生まれさせてくれるものだと感じた。私は威厳のある顔つきで、せっかくだから、この館の主人に会いたい、と告げた。ラビンは

「主人は忙しい人でして、屋敷内の案内程度でしたらできますが、御礼は弾んでもらいますよ」

と渋ったが、私が屋敷案内で良いと答え、お金を渡すと、それではどうぞとばかりに手招きのような不思議な動きをした。こうして門を開けてもらい、私は中に入ることができた。屋敷の中はがらんとしていたが、まばらに使用人らしき人間が働いていた。豪華な2階建ての邸宅はゆうに一階だけで20室はありそうだった。

「どうです。この、絵画は?」

ラビンは美術が好きらしく、有名な絵を自慢するために私を中に入れたような有様だった。イタリーナやフラシェルなどの国々で描かれた絵画が多くあるようで、聖母の絵や天使と悪魔の有名な作品が贋作か本物かどうかは判断できなかったが、並べられていた。どうやら、これらをサルガッソーにやってくる金持ちに見せて小遣い稼ぎにしているらしい。

私は屋敷の奥に入って人影のなくなるのを確認すると、ふいに薬をしみこませたハンカチをポケットから取り出すとラビンの口元に後ろから押し当てた。ラビンは激しく抵抗した。私が口に手を当てることができたのは一瞬だったが、それで十分だった。

「な、何をする。お前、ただの金持ちではないな、何者だ・・・・・・」

とそこまで言って、倒れた。私は彼の体を物置まで運ぶと、中に入れた。さて、いよいよフィンガーマークの屋敷を探ることができる。日も暮れかけていて、使用人は先ほど皆帰途につきかけていたのを確認していた。後はラビンのような警備人が心配だったが、私はラビンから奪った銃と地図をもち、服を着替えて、さらに屋敷の2階へと上った。

アルバタール・ギンガジザスという人間が、フィンガーマークと同一人物かはわからないが、可能性はかなり高いように感じた。それだけに、ガルド・イニエーブの手がかりを得られると期待して私は主人がいないはずの部屋に入った。そして予想通り、そこにいたのはサムと名乗った男だった。だが、既に息をしていなかった。死体が一体そこにはあるだけだった。これは、一体??私は動揺し、呆然と立ちつくした。

一章ガルド・イニエーブ<7>

サムのこめかみには穴が開いており、即死だったようだ。銃で至近距離から頭を一発撃たれた跡が残っている。一体何者がサムを？私は考えた。そして、フィンガーマークとはサムなのか？疑問も浮かんだ。すると、トントントンとドアをノックする音が聞こえた。私は慎重にドアの裏に回ると静かに相手が入ってくるのを待った。

「旦那様。飲み物をお持ちしました」

使用人らしき、髭を生やした小さな男が部屋に入ってきた。

「だ、旦那様。ヒィ」

私は男の背後に回ると銃を背中に突きつけた。

「静かにしろ。この男はお前の主人か？」

小柄な男はまた、ひぃと小さな声を上げたが、やがて

「はい。そうです。旦那様に間違いありません」

と答えた。男の声は動揺しているのか上ずっている。明日から仕事を失うだろう彼の境遇を思えば哀れまずにはいられなかったが、人の心配をしている場合でもない。このまま警察に通報でもしようものなら、まず疑われるのが私だからだ。とりあえず殺人が露見する間に手短に男に尋問した。

「主人の仕事はなんだ？」

「ギンガジザス様は法に触れる手術を多く行ったせいで、今はもっぱら裏の仕事をしている医者です。あなたがギンガジザス様を殺したのですか？」

間違いない。フィンガーマークはギンガジザスであり、サムだったのだ。

「違う。私ではない。恐らく、お前の主人を殺したのはガルド・イニエーブだ。奴のことについて知っていることがあれば話せ」

「あの法外の五貴族の……。たしか、５年程前に主人が確かに手術をうけおったことがあると思います。その時は多額の金額を得て、

専属の指紋師になったようです。ただ、最近は仕事がないといって旦那様も愚痴をこぼしてらっしゃいました。それで、最近、新たに客をイニエーブに隠れて探していたようです」
　男の声は震えていた。それもそうだ。死体はまだ暖かい。ガルド・イニエーブか、もしくはその手下は確実にこの国にまだいるだろう。もしかすると、この屋敷にいるかもしれないのだ。私は麻痺していた恐怖が湧き上がってくるのを感じた。だが、ここで諦めるわけにはいかなかった。
「お前も仇が打ちたいだろう。ガルド・イニエーブに関する情報は何かないのか？」
　良く見ると主人の部屋は荒らされていた。ガルド・イニエーブ一味は何かを探していたようだ。
「そういえば、ガルド・イニエーブの現在の指紋がわかるデータを保存していると言っていました。それさえ、あれば自分は安全だとも。あなたは一体何者ですか？」
　使用人にしては知りすぎていると不信に思った。私は逆に男の名前を訊ねた。
「私はギンガジザス様の秘書デンダロと言います。もう仕えて２０年になります」
「では、デンダロ。指紋データのあるところに案内しろ。ギンガジザス氏を殺したやつも、まだそこにいるかもしれない。仇を討ちたいだろう？」
「それは、もちろんですが、私は銃の扱いには慣れておりませんで・・・・・」
「わかった。それはいい。私が撃つ。お前は案内すればいい」
「わかりました。こちらです」
　怯えていた男は覚悟を決めたように部屋の外に出て歩き出した。どうやら、この屋敷は地下があるらしかった。生ぬるい風が階段の下からそよいできた。一歩一歩階段を踏みしめながら私の心は、ガルド・イニエーブに会うチャンスに恐怖よりも心躍る気もちになっ

た。何年この時を待っただろうか。
「や、ドアが開いている」
デンダロは小さな声でつぶやいた。どうやら先客がいるらしかった。私たちは静かに音をたてないように中に入った。

一章ガルド・イニエーブ＜８＞

地下室はひんやりとしていた。石造りの室内を柔らかな灯りがともしている。二人はおそるおそる奥へ歩を進めた。ふいに、私は物音を聞いた。奥の部屋から聞こえてくるようだが、音が反響してどこから響いてくるかわからないようでもあった。だが、確かに人の気配もする。デンダロの背に突きつけたままの銃を持つ手をぐっと握り締めた。デンダロも心得ているらしく、そろりそろりと足を動かした。進むにつれ、いよいよ物音が大きくなってきた。どうやら、聞こえている物音はやはり、奥かららしかった。私は身振りでデンダロにそこにとどまるように指示して、奥へと一人入っていった。耳元で「逃げたら、どうなるかわかっているな」とも脅しておいた。デンダロは小心者らしく、青い顔で無抵抗に目をつぶっていた。恐らく、忠誠心のみでここまで出世した男なのだろう。

私は灯りで作られた人影が動いているのを確認し、本体がいるに違いない方向に銃を構え声を発した。

「動くな」

何かを探していた男はびくっとして、両手を上げると、抵抗する意思がないことを表した。男の顔立ちは無骨でたくましかった。日に焼けた黒い肌とその隆起は少なくとも私以上の筋肉が備わっていることを確信させた。年の頃は５０くらいだろうか。顔には皺が刻まれている。さすがにフィンガーマークを殺した人間らしく、目には冷たい感情が滲み出ている。

「なんだい。坊や。おじさんは今仕事中なんだ。邪魔しちゃいけないな」

そう両手を上げたまま一言、殺人者は言った。

「ギンガジザスを殺したのはお前か？」

私はわかりきっていたことを聞いた。

「さてね、知らないね。坊やはこの屋敷の雇われ人かい？おかしい

な。家にいるやつは銃持っている警備兵は全て始末したはずなんだがね」
この男は嘘をついていた。警備兵を殺したと言っているではないか。やはり、ギンガジザス、フィンガーマークを殺したのはこの男に違いなかった。私は相手がもし、肯定すれば即座に引き金を引くつもりで聞いた。
「質問をするのは私だ。お前はガルド・イニエーブか？」
変な沈黙が辺りを包んだ。男は両手をだらりと下げて、ポケットに手をつっこんだ。
「動くな」
私はさっきより大きな声で言ったが、さして、射撃の腕があるわけでもない。男を万が一殺すのにためらいがあった。男はポケットから煙草を取り出すと、ライターで火をつけゆっくりと吸い始めた。
「坊やも、もしかして、同じ目的で来たのかね。ガルド・イニエーブの指紋が欲しいんだろ」
ふいに背後で気配がしたと思った瞬間、銃声が響いた。私はあまりの速さにあっけにとられていた。男が撃ったのだ。抜く瞬間さえ見えなかった。倒れたのはデンダロだった。その手には銃があった。私はこの秘書を甘く見すぎていたらしい。九死に一生を得た。男は私も撃つかと思ったがそうはしないらしい。
「何故。私を助けた？」
「別に坊やを助けたわけじゃねえよ。この男がデンダロか、そういや始末し忘れていたぜ。まあ昔、死んだ家族に良く似ていたからとでも言っておくかね」
男は顔を見ただけで、デンダロとわかるほど下調べをしているらしかった。それは事実だった。だが、言葉の後半は、また適当な嘘を並べているらしかった。敵ではないようだった。男の銃の腕前は私を遥かに凌駕しているらしかったので、私も銃口を下げた。形勢は逆転したのだ。男も持っていた銃を下げた。わりに紳士的な男らしかった。

「坊やが法外の五貴族の手下っていうんなら、こんな楽なことはありゃしないわな」
そういって男はまた煙草の煙を吐き出した。
「俺は、法外の五貴族に法外な手段で戦う組織の一員だ」
男の口から出たのは驚くべきセリフだった。私は味方を得たと思っていいのだろうか？はっきりとはまだ判断がつかなかった。

一章ガルド・イニエーブ＜9＞

「法外の五貴族と戦う？組織？」
私は寝耳に水がはいったかのように、驚いた。この男は信用できなかった。だが、とりあえず私の命を奪う考えはないようだった。半信半疑ながらも話を進めることにした。
「“法外な”ということは法の枠内に入らない行動をして、法外の五貴族を倒そうと？つまり、今回のように何人もの罪のない命を奪うということか」
少し怒気をはらんだ口調で私は男に問いただした。
「坊や。だから、坊やなんだよ。罪の良し悪しは俺らが決めることではない。ただ、法外の五貴族と戦うためだけに作られた組織といったはずだ。そのためにはあらゆる手段もいとわないのだよ。ただ、それだけだ。ほらっ。ガルド・イニエーブの指紋だ。もっとも、それは過去の物らしいけどな。それで満足するんだな」
男は小型の電子記憶装置を私に渡すと、さらに続けて
「さて、やつの現在の指紋も手に入ったし、俺はそろそろお暇するぜ。俺のことは“スモーク”とでも呼んでくれ。また生きて会えたらの話だがね。この屋敷はもうじき爆破するぜ」
と言って今いる部屋から出て行こうとした。何故このスモークが、私にここまで親切なのかわからなかった。そして何故顔を見られたにも関わらず私を生かしておいているのか。
「待て。何故私を殺さない？」
スモークは蛇のような恐ろしい目でこちらを見ると
「殺して欲しいのかい？」
と聞いた。私が何も答えないのをみると、スモークは去っていった。脱出は簡単だった。使用人は既に引き上げているらしく、屋敷には人影もなかった。警備兵の姿も見えなかった。どうやら、スモークはかなりの人数を率いてきていたらしい。死体もきれいにかた

づけられているようだった。急いで屋敷を出て、歩いて最寄の駅に着くと、ギンガジザス邸から煙が上がっていた。
法外の五貴族は必ず倒すと誓っていたので、思わぬライバルの出現に、少し先を越されないか不安になった。しかし、今日の収穫はガルド・イニエーブの指紋が手に入ったことで満足しなければいけない。その夜、電子記憶装置のデータにはたしかに、何者かの指紋が入っていた。だが、ガルド・イニエーブも馬鹿ではない。ギンガジザスが死んだことに遅かれ早かれ気づくだろう。その前に過去の指紋をどう使って、イニエーブを追いつめるのか？と考えたが、一個人には不可能なものばかりだった。スモークの組織にはたしかに力がある。だが、私も法外の五貴族の知識に関しては勝りこそすれ劣ってはいないはずだ。何か、もう一つ、ガルド・イニエーブの居場所を見つける情報が必要だった。そのとき、はっと思い当たった。そうだ、グニア事件―ゲルマン統領への成りすまし事件―の時消された行方不明者の指紋のことが浮かんだ。もし、あれが、ガルド・イニエーブが自分の昔の記録を抹消するために行ったことだとしたならば・・・・・・。再びゲルマンに向かう必要があった。

一章ガルド・イニエーブ＜１０＞

ゲルマンは以前きたときと季節が変わっていて、もう暑かった。今度はゲルマンでありきたりな服装をして、うまく街に溶け込んだ。行方不明者の指紋の照合を行ってくれる部署がこの国にはあって、行旅不明人捜索部というらしい。私はさっそく、過去のガルド・イニエーブの指紋を持っていった。調査には２～３週間かかるらしい。ゲルマンは大きな官僚国家であったが、腐敗もまたひどかった。最初一ヶ月といわれたとき、どうしようかと思ったが、賄賂を払うことによってだいぶ縮まったのだ。もっと急いで欲しかったが、それ以上はいくらお金を積んでも無理らしかった。

暇な時間などない。私はライバルとなるだろう、スモークの組織を調べることにした。大きな組織ならば、当然何らかの情報も出ているだろう。首都アルベリンのカルトアサラ大学の図書館で私は調べた。過去２０年の間に、法外の五貴族に挑んだ組織は４つあったが、今は全てなくなっているらしい。この４つのうちのどれかがスモークの組織の前身なのだろうか。組織の名前は『天使の輪』『革命団』『国際警察機構』『国際協同体犯罪部』前者２つが、民間の組織。後者二つが公的な国際機関である。だが、４つとも、壊滅したとある。このような巨大な組織をも退けてきた法外の五貴族の恐ろしさを改めて認識した。私のやり方は甘かったのだろうか。いや、そうではない。法の外というところは、私も同意する。本当はしたくないのだが、金集めに違法すれすれのことをやっている身としては否定などできるわけもなかった。だが、人を無造作に殺す組織もまた、法外の五貴族と同じ穴のムジナではないのか。そう思うからこそ、スモークたちの仲間になろうとは思わなかった。２週間調べてわかったことは、あまりなかった。暗い気もちでいたところに、指紋の照合結果が届いた。

そして、２週間後結果が来た。答えは該当者なし。これは予想通りだった。何故なら行方不明者のデータは偽のグニア統領によって既に抹消されているはずだからだ。しかし、同時に私は賄賂で、犯罪歴のある人間のデータについても調べてもらっていた。結果は見事にあたった。ヨーゼフ・ケックスルーという名前の前科者とぴたりと一致したのだ。犯歴は窃盗だった。住所はズデーデ県アルタラ街７－１８。私はそこに向かった。いよいよ、ガルド・イニエーブの本名を掴んだのだ。これから過去を暴いてやるぞ。待っていろ、ガルド・イニエーブ。

一章ガルド・イニエーブ<11>

アルタラ街というのはゲルマンでは珍しい貧民街だった。住所の場所を人に聞いて回ったが、ジャスール語ができる人間はいなかった。聞かれた人々は黙って笑顔を向けてくるだけだった。仕方なく、地図を頼りにようやく、ヨーゼフ・ケックスルーの当時の家を見つけた。が、見るも無残な廃墟であった。みすぼらしい家に雑草などが生え放題になっていて人の住んでいる気配はなかった。少し考えた後、通訳をアルベリンから呼び寄せた。通訳の人は朗らかで、有能な女性だった。名前をユレニア・マクマーシといった。私たちはすぐに打ち解け、ユレニア、ビルグと呼び合うことになった。私はさっそく、近所の住人にユレニアを介して話を聞いた。最初に聞いたのは、この街の長老とも呼ばれる老人だった。

「ヨーゼフ・ケックスルーという名前を覚えていますか？」

「ああ。覚えているとも。可哀想な子だった。今はどうしているのやら」

「知っていることを何でも教えてくれませんか？お礼は弾みます」

「わしらを貧しい者と思って馬鹿にしているのか？若いの」

「いえ。そんなことは、あくまで気もちです」

「ふん。まあいいだろう。話してやろう」

「感謝します」

ヨーゼフは若くして両親を亡くし、よく隣町の子供たちにいじめられていたらしい。祖母がいたが、もう年で介護も彼がしていたらしい。子供のヨーゼフ少年にとって、このような、居場所のない境遇がどれほどつらかっただろうか。彼はやがて、成長するにつれ、人の顔色を窺うのがうまくなっていったと老人は話した。そして、抜群の物真似の才能を開花させ、詐欺を繰り返していたという。その時捕まったのが、記録にあるデータであろう。そして、刑務所を

出た後パタリと消息を絶ったらしい。最後に老人は、彼が詐欺で貯えたお金で、『死者復活の技術』の情報を収集していたことを話した。

「決して叶わぬ禁断の果実に手を出そうなど・・・・・・。変わった青年じゃった」

老人は最後にこう言って懐かしむように遠くをみやった。

なるほど、彼が何をしようとしているのかの情報がとりあえず手に入った。もちろん可能性の域を出ないが、ヨーゼフことガルド・イニエーブは死者の復活に興味があるらしい。これが、大きな鍵になりそうだ。私が何故このようなことを調べているかユレニアは興味をもったらしかった。ただ、彼が今どこにいるのか探している、とだけ答えた。聡明な彼女はさらに聞こうとはしなかった。こうして、私たちは握手をして別れた。彼女の好意は感じていたが私のような終末者が応えられるはずはなかった。そして、イニエーブは一体誰を復活させようとしているのか。そのようなことが、可能であるはずもないのだが……。彼の犯罪で貯えた金をもってすればあるいはとも思った。そして、その技術は私にとっても母の生き返りを夢想させるには十分だった。何もかも、が元通りになるなんてありえないにもかかわらず。

一章ガルド・イニエーブ<12>

あたり一面に金色の庭が現れた。小麦だった。新しい世界の門出に立っている気もちでガルド・イニエーブは庭の中央に立った。大いなる小麦“ドラゴニア・エターナル”から取れるエキスを抽出すれば、夢はきっと叶うに違いない。法外の五貴族として、数々の悪行を重ねてきた甲斐があろうというものだ。自然と笑みが漏れる。ようやく、ようやく今度こそ叶うに違いない。この至福の楽園には誰であろうと決して入ることはできないのだ。

「アッシュ。アッシュじゃないか」

ふいに後ろから声をかけられた。本名を知っている人物がいたのには驚いた。ここはアーリア帝国のイエニチェーリ大学だった。蘇生技術の第一人者、アルラウネ博士の研究室で、何故私の本名を知るものがいるのだろうか。恐る恐る振り返ると、ガルザニ叔父だった。なるほど確かに聞いた声だった。

「叔父さん。何故ここに？」

「出張でここの博士に会いにきてね。仕事なんだよ」

叔父は真剣にそう話した。叔父とは別にアルラウネ博士に用事があった。ガルド・イニエーブの重要な情報をもらいに。できることなら叔父は巻き込みたくなかった。何よりも従妹のサニチェエートを。

「アッシュも似たような用事らしいな」

叔父は察したように言った。

これ以上私の本名を吹聴されるのが我慢できなかったので、早々に別れようとした。しかし、叔父はお茶でもどうだ、と半ば強引に私を誘った。渋々と私も危険を承知でカフェに向かった。

「投資は順調か？」

「ええ。まあまあです」

そわそわしながら私は答えた。
「私も投資をしてみようと思ってな。ビルグ投資会社というところに投資したよ」
なんだって。これは果たして偶然なのか。ビルグ投資会社とは私が作った無限連鎖講の運用会社である。何故叔父がよりによってそんなところに投資をしたのだろうか。少し聞いてみることにした。
「それで叔父さん。どんな会社なんですか？」
「なんでも、会員を増やせば増やすほどお金が入ってくる仕組みなんだよ。今日も、さっそく知り合いの博士に世間話ついでに入らないか誘ったのだよ。何故か断られたがね」
叔父は満面の笑みで煙草の煙を吐きながら話した。叔父は勤勉な人間だが、人の好さでだまされやすいのだ。なんということだ。お金が入れば入るほど叔父は首謀者の私との関係から共犯者として扱われるに違いない。そして、お金を損しても、また地獄だった。というのも、カレラ叔母は重度の心臓病にかかり、多額の手術費がいるようになったからだった。叔父はそう私に話すと、最後に立ち上がって明るくいった。
「こっちのことは何も心配するな。仕事で作った人脈できっとカレラを助けてみせる。お金を返せなどとはいわないから心配するな」
「叔父さん。私も出しますよ。いくらですか。いってください」
だが、叔父は黙って首を振った。
「何も心配するな。アッシュ。万事うまくいく。うまくいくさ」
自らに言い聞かせるようにカルザニ叔父は優しく言うと帰っていった。私はしばらく茫然としていたが、本来の目的を思い出してアルラウネ博士に会いに、研究室に再び戻った。

一章ガルド・イニエーブ＜１３＞

博士は部屋に戻ってきていた。汚れた白衣を着ていた。薬品がかかったのだろう、変わった黄色に変色していた。体は小さかったが頭は大きかった。脳の後頭部が大きく後ろにせりだしていた。大きな脳をもっているらしかった。だが、言動はどこか奇妙だった。まばたきを頻繁に繰り返し、口元には薄笑いを常に浮かべていた。

「博士。人間の蘇生について聞かせていただきたい」

思い切って言ってみたが、答えは冷たいものだった。

「断る。わしは今、あるお方と研究をしていてな。決して他言無用というわけじゃ。わしの研究の偉大さの理解者がようやく現れたのじゃ」

「博士。お金なら出します。私も関わらせてくれませんか？」

「だめじゃ。だめじゃ。お前さんの財力がどれほどのものか知らんが、あのお方は桁外れの金持ちじゃ。素性は謎じゃがのお」

「１０００万マルセルでいかがです」

「ケッケッケ。そんなはした金いらぬわ」

間違いない。これほどの財力を持っているものはガルド・イニエーブに違いない。この博士が計算違いをしていたのは私の意志の強さだった。若い私の容貌もあなどりやすかったのかもしれない。翌日から、掃除夫の姿をして、博士の動きを探った。博士は学内の誰にも関心ないらしく、２，３度すれ違ってもまるで、ただの障害物のように私を避けていった。そうすると、博士はある日、学校の外へ出かけた。すかさず後を追ったが、どうやら、博士を追っているのは私一人ではなかった。じっと、博士をつけている男がいた。スモークだった。スモークはとっくに私に気づいているらしく、にやりと薄気味悪い笑いを浮かべた。博士が昼食に店に入った時、私とスモークも同じ店内で食事をした。スモークは近づいてきた。

「よう。坊や。驚いたな。この男にまで辿りつくとはね。過去の指

紋が役に立ったようだな」
「おかげさまで。だが、お前たちの仲間になるつもりはない」
「それでいいさ。だがな。気をつけな。組織には俺のように優しい奴らばかりじゃないんだぜ。おっと奴が動き出したぜ。いくとするか」
博士は大きなビルの最上階にエレベータで向かったらしい。それとともに、大きなプロペラ音があたりをにぎわした。
「まずいな。逃げられる」
スモークは軽く走り出すと、銃弾をヘリコプターに打ち込んだ。ヘリからは数十発の銃弾が発射されて、返ってきた。スモークはその反撃を予期していたらしく、壁に隠れてかわしている。ヘリコプターは何事もなかったかのようにどこかへ飛んでいった。
「さて、発信器つきの銃弾を打ち込んでおいた。一緒に来るかい。坊や」
私は黙って肯いた。

一章ガルド・イニエーブ<１４>

スモークは私を組織の仮本部のようなところに案内した。道中、スモークに彼らの組織のことを少し聞いた。
「法外の五貴族には『法外の革命結社』と呼ばれているがね、我々は自分たちのことをなんとも呼んでいない、ただ『我々』というだけだ。俺が部外者である坊やにいえるのはそのくらいさ。いや、ビルグ・オノエーブラを騙るアッシュ・クロフォード君」
「私のことを調べたのか。スモーク」
「おっと。怒りなさんな。こっちも見逃した以上は、それなりの調査はするさ。君は攻撃はいいが、防御はまだまだだな。もっとも、ガルザニ叔父さんが現れるまでは、こちらもなかなか掴みようがなかったがね」
スモークはまた軽く笑った。確かに、彼らの組織をもってすれば、私のことなど調べるのは容易だろうとは思った。知られたところで、法外の五貴族にさえ知られなければ敵ではないのだから、構わないという気もちもあった。むしろ私の素性を知って、積極的に勧誘してくるだろうことはこちらも想定済みである。
到着した仮本部は薄暗い部屋だった。高層マンションの一室にスモークの仲間も集まっていた。
「き、君は」
思わず、私は目を疑った。ユレニア・マクマーシだった。
「ようこそ。ビルグ。いえ、アッシュ。この前はどうも」
女はずいぶん化粧の仕方などを変えてはいたが、間違いなくユレニアの顔と声であった。
「ユレニア。君もこの組織の一員だったとは。当然あれも偽名なんだろう？」
私は不快気に言った。
「ええ。そうね。でも、あなたユレニアを気に入っていたようだか

ら、そのまま呼んでもよくてよ。もっとも本物は５０近いおばさんだけどね」
　女は意地悪そうに笑った。彼女を罵倒することもできたが、目的の前には個人の感情など無意味だった。はやく、ガルド・イニエーブの居場所をつきとめなければならなかった。
「ふん。なんでもいい。それよりもスモークが撃ちこんだ。発信器が相手に見つからないうちに、追跡しよう」
　冷静に私が言うと、もう一人部屋のすみにいた若い男が口を開いた。
「いいねえ。こいつ。気に入った。もう仲間気取りは、ちと不快だがな。よく、何をすべきか心得ている。俺はジョベルジアっていうもんだ。よろしくな」
　男が差し出した手を私は黙ってみると
「追跡はどうなっている」
　とだけ言った。ジョベルジアは肩をすくめてスモークを見た。
「おやっさん。どうしましょうか。仲間でもない。敵でもない」
「安心しろ。坊やは俺たちの情報をもっているわけではない。この作戦だけ協力者ということにして、その後はそれから考えよう。もう、すでに本部には了承済みだ」
　スモークは部屋の中の椅子に腰掛け、テーブルの上にのっている機械をみながら言った。これが追跡装置らしかった。
「大丈夫かねえ。おい。ガゼル。お前も何かいったらどうだ」
　ジョベルジアはユレニアだった女にも聞いた。仲間内ではガゼルと呼ばれているらしい。
　ガゼルは髪をかき上げて
「あら。私も賛成よ。この人頼りになるわ。それに本部の了承を得ているなら、私達が口を出すことでもないでしょう」
「そりゃ。そうだけどよ。ちっ」
　ジョベルジアは舌打ちして、黙った。
「この座標は、監獄島か・・・・・・。またやっかいなところにい

るもんだな」
スモークは一人つぶやくように言った。
監獄島？犯罪者たちの脱獄を防ぐために作られた人工島のことか。中には凶悪な犯罪者が囚われていると聞いたことがあった。私たちは、微妙な壁をお互いに感じながら、監獄島へ向かうことになった。ガルド・イニエーブがそこにいると信じて・・・・・。

一章ガルド・イニエーブ<15>

当然、犯罪者たちの仲間による監獄の襲撃から島を守るために監獄島には様々な仕掛けがおかれていた。だが、看守たちは交代のために、島を出入りしていることはおよそ間違いない。正規ルートが使えない時にどれほどの困難が生じるか想像に難くない。スモークたちは真っ当な理由をつけて、入れるだけの力があるのか、いい見極めにもなる。彼らの組織に入るつもりは毛頭ないが、利用できるならば利用してやろうといったところだ。が、スモークはただ利用されるつもりはないらしかった。

「アッシュ。お前さんの持っている情報が欲しいのだよ。我々は確かに組織を組んではいるが、相手の情報を大っぴらに探るわけにはいかない立場でね。特にあの事件のことは」

過去を克服していたはずなのに、急にあの時の母を亡くした悲しみが襲ってきた。そして、同じくして記憶も脳裏によみがえってきた。スモークに無表情に顔を覗き込まれているのに気づくと、かすれた声で返答した。

「秋の大殺戮のことか。話してもしょうがないことだ。私の母は流れ弾に当たって亡くなった。それだけだ」

「それだけのために、復讐を？直接手を下した人間ではなく、首謀者を追いかけているのかね？」

「わかってもらおうなどとは思っていない。だが、法外の五貴族はかならず裁いてみせる」

ガゼルが少し苛立った様子で口を挟む。

「昔、あなたと同じようなことを目指した組織はあったわ。でも、敗北した。法外の五貴族にね。あなたは傲慢ね。何かを失わずに何かを成功を収めようなんて。ただ、だらだらと家族とも中途半端に距離を保ちながら、事が終わったら何もなかったように戻ろうとしている。ここにいる人間はね。何人もの人間をこの手で殺めてきた

のよ。それだけの覚悟があって初めてやつらと戦えるのよ」
話はまだ続きそうだったが、スモークがすっと手をあげて興奮しているガゼルを制した。
「アッシュ。ギンガジザス邸でのことを覚えているかね？俺が助けなければお前さんは死んでいたんだぜ。恩にきせようっていうんじゃない。お前さんは甘ちゃんってことだよ」
確かにその通りだった。甘かったのだろうか。再び自問自答してみた。だが、やはり、彼らの信条とは、あいいれなかった。
「私は私の道を行く。協力してくれなければ結構だ。私一人でやるまでだ」
そう言うと、ジョベルジアが腹をかかえて、笑いだした。
「クックック。とんだ喜劇だ。どうやって俺らの組織の協力なしに、監獄島に行こうっていうんだ。たいがいにしろよ。このやろう」
後半では怒声に変わっていた。私は静かに去ろうとした。が、スモークが銃を構えて私を制止する。
「卑怯だぞ。スモーク」
歯噛みする私にスモークは
「とにかく、ついてきな。監獄島へ行く準備はもうすぐ整う。お前さんの知識も必要なんでな」
とだけ言った。渋々従うしかなかった。
法外の革命結社は、アーリア帝国とも強力なコネがあるらしかった。まもなく、迎えの車が来て、ヘリポートに私たちは到着した。肩書きは監獄島の犯罪者の実態を記事にするジャーナリストだった。プロペラが回りだし、４人は監獄島へ飛んだ。

一章ガルド・イニエーブ<16>

海面からビル5階程の高さに監獄島は位置していた。この断崖から何人もの受刑者が自由を夢見て、散っていったことは容易に想像できる。空から見る限り、この島には海岸らしきものがまったくないようだった。沖の激しい波は、波間に漂う無数の岩に打ちつけている。島の中心部の一角にヘリの離着陸場があった。私たちはヘリを降り、出迎えの人間に監獄島の所長のところに連れていかれた。所長室はヘリポートからすぐの建物の3階にあった。

「ようこそ。ジャーナリスト諸君。近年ここを訪れようとするつわものもいなくなってしまってね。まあ、ここの恐ろしさを存分に記事にしてくれたまえ」

所長は座ったまま、黒子に生えた毛を一生懸命に手で引っこ抜こうとしている。私たちには目もくれない。スモークは何気なく、窓の外を見ながら質問した。

「どうやら、もう一機ヘリがあるようですが、先客ですかな」

ここはスモークに任せておいたほうがいいらしい。それに、ガルド・イニエーブがここにいるとすれば、すでにここは敵地であると見たほうがいいかもしれない。慎重に行動しなければならなかった。所長は作業を続けたまま、

「ああ。あれはね、囚人への面会だね。こんなところまでよくきたものだよ」

と呆れたように言った。スモークはジャーナリスト風にペンをメモに走らせ

「その囚人の名前はなんですかね？取材できますかね？」

と訊ねた。ジョベルジアとガゼルは油断なくあたりを観察している。よく教育されている。問題はどこからどこまでが敵で、どこからどこまでがアーリア帝国の官吏かということだ。手段を選ばないといっても、アーリア帝国を敵にまわすとなると、さすがにまずい

だろう。眼鏡をかけた所長は初めてこちらをみた。
「さあね。直接そこに行って聞いてみたらどうだい。おい。ゼルド」
大声で、所長が叫ぶと、一人の背の高い男が部屋にのっそりと入ってきた。
「お呼びですか？」
「ああ。呼んだ。囚人に面会に来ている、なんといったかな。アルラウネさんだったかな。その人が、いるところにこの人たちを案内してやりなさい」
所長が命令すると、ゼルドという男は少しビクッとしてから
「はい。わかりました。こちらへどうぞ」
と部屋の外に出るように私たちを促すと、先頭に立ってゆっくりと廊下を歩き始めた。４人は囚人の監獄にどうやら連れていかれるらしかった。獄舎は所長室のある建物のさらに奥にあるようだ。
「さあ。着きましたよ」
しばらく歩くとゼルドが言った。そこには、アルラウネ博士がいた。彼は私の顔を見ると
「お前は！！」
と驚愕した。
「博士。ガルド・イニエーブはどこです？」
私は思いあまって聞いた。

一章ガルド・イニエーブ<17>

「イニエーブ。そこにいたのか」
博士は私たちを見ながら誰かに声をかけた。
一瞬何を博士が言ったのか理解できなかった。だが、博士は私以外の誰かを指してイニエーブと呼んだのだ。看守のゼルド、中年のスモーク、若い女性のガゼル、うるさい男のジョベルジア。一体、誰がガルド・イニエーブなのか・・・・・。可能性として最も高いのはさっき会ったばかりのゼルドだろうか。だが、他の3人も信頼できるほどに時を過ごしていたわけではなかった。ジョベルジアが口を開いた。
「おやっさん。アッシュという人間なんかもともと存在していなかったんだよ。一杯食わされたわけさ。こいつがガルド・イニエーブなのさ」
スモークは少し考えて、
「アルラウネ。お前はこの中にガルド・イニエーブがいるといっているのかね？」
「わしのいうことに間違いはない。まあ良い。誰がイニエーブでも、あそこにいけばはっきりするじゃろう。イニエーブ以外は受けつけない。例の部屋に入れる人間だけがイニエーブなのじゃ。ケッケッケ。ついてくるがいい。ゼルドお主も来い」
博士は不気味に笑った。看守もどうやらついてくるようだった。
私もとりあえずは誰がガルド・イニエーブなのかは置いておいて、秘密の部屋に行くことを決めた。真後ろにはジョベルジアが私を警戒して、ぴたりとついて歩いている。
監獄の奥深くには地下に通じる巨大な扉があった。
「さあ、それぞれ指紋をあわせてみるのじゃ。黄金の庭に通ずる道を開くためのな」
まずはガゼル、何も起こらない。

次にジョベルジア、何も起こらない。
そして、看守のゼルド、また何も起こらない。
私も手をドアに押し当ててみる。が、当然何も起こらない。
残るはスモークとアルラウネ博士だった。私はここまできて、アルラウネ博士の勘違いであろうと思い、入る方法を考え始めた。
だが、音をたてて扉が開き始めた。スモークの手によって。
「スモーク！！」
私はつぶやき絶句した。この男だけはないと思っていたのに。それとも、スモークがいつの間にかガルド・イニエーブにすりかわっていたのか??アルラウネが愛想笑いをして中を案内しようと先頭に立つ。
「さあ、参りましょう。ガルド・イニエーブ様。相変わらず完璧な変装ですな。他の者はどうされますか？」
スモークは茫然と立ち尽くす４人を見て
「ついてこい。私の偉大な研究成果をみせてやる」
と言った。武器をもっていなかった私たちは黙ってスモークに従うしかなかった。

一章ガルド・イニエーブ＜１７＞（後書き）

６月１３日から再開します。

一章ガルド・イニエーブ<18>

「おやっさん。いったいぜんたいどういうわけだ？俺らは法外の五貴族を葬るために、やってきたんじゃないのか！それが、おやっさんがイニエーブだって？？そんな馬鹿な！」

ジョベルジアの悲痛な声。ガゼルの重苦しい沈黙。

「ジョベルジア。いいから黙ってついてくるんだ！」

スモークはいつものように、子供に言い聞かせるように辛抱強く言った。スモークの皮の靴が石段を鳴らす音がまた始まった。まるで、この世界でないどこかから響いてくるようなそんな、音だった。それにつられるように、アルラウネ、ガゼル、ジョベルジア、私、ゼルドの順に階段を降りはじめる。下へ深く延びる階段の先に強烈な灯りが見えてきた。どうやら、目的地についたらしい。そこには黄金色の穂が広い空間いっぱいに生い茂っていた。

「何故こんな地下にこれほどの小麦が？？太陽もあたらないのに・・・」

ガゼルは不思議そうにつぶやく。すると得意気にアルラウネ博士が口を出す。

「ケケケ。太陽がない。そうとも太陽がない。ふふふ。そこに蘇生の秘密を解く鍵があったのじゃ。大昔、人間は土から生まれたと神話にあるのをご存じかの？お嬢さん？」

「人間は神が創造したのじゃなくって？」

「それはお主の国の考えじゃな。世界は広くての、そういう神話もあるのじゃよ」

スモークは黙っていた。その様子を気にしながら、アルラウネは話を続ける。

「そこにおられる変装の名人であり、法外の五貴族であるイニエーブ様の莫大な金銭的助力を得て、わしの理論を実行する機会を得た。そして、できたのが、永遠の小麦とも言われるものだったのじゃ。

だが、生育方法は普通の稲とはまったく別じゃ。決して光を当ててはならぬ。決して日の光をな。南アルドニアの洞窟の奥地で、やっと見つけたのじゃ。幻の古代文書に記された。永遠の小麦をな。ふふふ。イニエーブ様。どの人間でお試しになりますか？ケケケ」

スモークは銃を懐から取り出すと、看守のゼルドに向けて撃った。ゼルドの胸からは真っ赤な鮮血が飛び散り、ゼルドは倒れた。

「良いのですか？ゼルドはあなたの忠実な部下・・・・・・」

アルラウネ博士は怪訝そうにスモークを見つめる。

スモークは銃に弾をさらにつめながら、死体を冷たく見ると、

「かまわん。どうせ生き返るのだろう？」

「もちろんですとも」

アルラウネは自らの研究の成果をイニエーブが信頼しきっているとみて、満面の笑みを浮かべた。

「使い方は簡単です。小麦を沸騰させた水で煮てやれば良いのです。その液体を傷口に塗ればよいのです」

そういって、あらかじめ作っておいたらしい、小麦の液を汚れた白衣のポケットから取り出すと、看守の死体の傷口にかけた。

一章ガルド・イニエーブ<19>

傷口はみるみる塞がっていったようだった。看守の制服から血が止まった。やがて、看守ゼルドの顔に血の気が戻ってきた。ただ、その目は虚ろだった。そして、ゆっくりと片膝を立て、手をついて立ち上がった。アルラウネ博士は狂喜していた。

「イニエーブ様、見ておられますか？生き返っていますぞ。そう、今、人類史に残る禁断の扉が開かれたのですじゃ」

喜ぶ、アルラウネの他の４人はゼルドの異常に気づいてた。目だけではない。全身が黒ずんできて、口から涎が出ている

「おやっさん。やばいぜ」

ジョベルジアがガゼルをかばうように位置を変えた。

スモークは憎憎しげに、今まで聞いたことのないような悲しげな声を出した。

「やはり、だめだったか。もう俺の記憶の中のあの人はいないのだろうか・・・・・・」

叫び声があたり一面にこだました。生き返ったゼルドは既に正気の人間ではない。

アッシュはスモークが深く失望しているのを感じた。そして、隙をついて、次の瞬間、銃をスモークから奪い取ると、ゼルドめがけて、撃った。撃たねばこちらが危なかったのだ。常人とは思えぬ脚力で、ゼルドは5人に向かってきていたのだ。向かってきていた看守だったものの体は慣性でアルラウネ博士を吹っ飛ばした。強く壁に体を打ちつけられた博士はその場に崩れ落ちる。

「説明してもらおう。スモーク。お前はガルド・イニエーブなのか？」

アッシュは銃を握り締めて言った。主導権は私に移ったのだ。

スモークはポケットから煙草を取り出すと、ライターで火をつけた。

「もちろん。違うさ。これは、ガルド・イニエーブの指紋を手に移

植したものさ」
「おやっさん。何故俺らにまで黙ってたんだよ」
ジョベルジアは非難がましくスモークを見る。
「俺は武器を持っていたら迷わず撃っていたぜ」
「ふふふ。お前らしいな。ジョベルジア。坊や。さあ、銃を下ろしてくれ」
スモークは少し頼もしそうに青年を見てから私に声をかけた。だが、私はまだ聞きたいことはあった。
「では、本物のガルド・イニエーブはどこだ？」
スモークの口の先の方で煙草がポッと燃える。その質問はガゼルとジョベルジアも聞きたいものだったらしく、二人とも興味深そうにスモークに視線を走らせる。
「奴は必ずここにやってくる。待とうじゃないか」
その時だった。イニエーブの指紋でしか、開かないはずの扉が開く音がした。ギギギィー。鈍い音だった。スモークは人差し指を唇にあてると、皆に小麦の中に隠れるように手振りで示す。私も3人にならい、身を潜める。階段を下りてくる足音はだんだんと近く大きくなってきた。そして、洞窟の部屋の入り口で止まった。私はサッと銃を持ち飛び出した。

一章ガルド・イニエーブ＜２０＞

そこに立っていたのは、真っ黒な顔をした背の高い男だった。一目で、一般の人間ではないと私は気付いた。視線の鋭さ、シルクハットをかぶった威容。どれをとっても、この男がガルド・イニエーブだと私は確信した。黒衣のマントに日焼けしたような浅黒い肌を顔だけから窺わせながら、男は口を開いた。野太いしっかりした声だった。後ろの小麦畑には人の気配がある。まだ、スモークたちは隠れているらしかった。

「やれやれ、銃など向けて何様のつもりだね。ここは私の私室だよ。君、早々と出て行きたまえ」

私は男の放つどす黒い威圧感に緊張しながらも必死に声を絞り出した。

「確認したい。ガルド・イニエーブに間違いないか？」

黒い男は無表情に私に答えた。

「そうだ。もしかして君かね。腕のいい私の手術師を亡き者にしたのは？まったく困ったことをしてくれたね。私の正体を知っているということは目的はなんだね？金かね？それとも名声かね？女かね？」

「ふざけるな。そんな目的のためにお前に会いにきたわけではない」

怒気をはらんだ声で私は告げる。これまでの復讐の旅路を・・・・・・。

眉一つ動かさずにイニエーブは畑を見回した。

「これを見たまえ。これは今は不完全だが、やがて、この研究は全世界にとってなくてはならないものになるだろう。何しろ死者が生き返るのだからね。だから、そんな人一人の命で復讐などと器の小さい言葉は慎みたまえ。君の母さんも生き返らせてあげると約束しよう」

「母が生き返ることを望んでいると？」

「そうじゃないのかね？」
イニエーブはわずかに唇を歪めた。
私はもし、母が生き返るならば、どうするだろうと考えた。今の段階では、神秘の小麦の力は不完全だ。そして、この先も、何かをまったく元通りにすることなんてできやしないだろう。私の復讐に費やした年月のように。
「イニエーブ。お前は夢を見過ぎている。人を生き返らせて何をしようというのだ！」
「よろしい。特別に、君には話してやろう。これを見たまえ」
イニエーブは自分の黒衣の中を手で探ると、中からひからびた骸骨が出てきた。

一章ガルド・イニエーブ<21>

白骨化した人の頭部を取り出したイニエーブは高らかに宣言した。
「この頭部は偉大なる古代人種グラザビルグの頭部だ。かつて、無限の力をもつと言われた人種だ。彼らは我々とは大きく脳の構造を異にしていて、不思議な力“不可術”を使った。大地を揺るがし、暴風を起こし、雷をあたり、一面に鳴り響かせた力だったという。君はその力を前にして、畏敬の念を持たないかね？そして、古代のロマンあふれる時代に時間軸を戻すのだ」
「つまり、古代人種を蘇らせたいということか。そのために、それだけのために多くの人々の命を奪ってきたのか？」
「何をいっている。犯罪者と資本家の違いは自ら手を下すかそうでないかの違いだけだ。わたしは正直者だと思うね。至極まっとうな方法で金を稼いでいる。偽善者ぶった人間とは違うのだよ」
「ならば私がお前の命を奪うことも、また正直者ということだな」
「まったくそのとおり、だが、残念ながら、君の望みは絶望的に空想じみている。君は引き金を引けばいいと思っている。それで終わりだとね。だが、実際は違う。力にとりつかれた、自分でいうのもなんだが、そんな男が銃程度で死ぬ体だと思うかね？」
私はイニエーブの奇妙な自信に不思議と信じこまされていた。もしかして、やつに銃が通じないのではないかと。だが、強い私の憎しみの動機は指をとめてはくれない。銃を構え良く狙うとイニエーブの胸めがけて、撃った。
ゴオオン。
あたりを弾薬の嫌な臭いがたちこめる。
イニエーブは胸を撃たれたにも関わらず、何事もなかったかのように立っていた。
「ば、ばかな」
私は確かに、胸から滴り落ちる血液を見て、イニエーブの胸の銃

弾が命中したのを確認した。だが、動かない。
ギギギギ。金属の音がする。イニエーブの体から聞こえてくるようだった。
「サイボーグ化だな。イニエーブのうち元の体が残っているのはおそらく脳と心臓だけだろう」
スモークがいつの間にか立ち上がっていた。
「坊やの手には負えんよ。下がっていなさい」
銃が効かなかったことで手の内がない私は慙愧に耐えなかった。
スモークはポケットから特殊な銃弾を取り出した。そして、私から優しく、銃をとった。

一章ガルド・イニエーブ<22>

「何者だ。お前は」
今のイニエーブの声は機械じみた変な電子音だった。問われたスモークはゆっくりと銃を構えながら答えた。
「フィンガーマークの命を奪った者といえばいいのかね」
「なるほど。お前か、どおりでこの復讐に燃えた青年に手術師を倒す気概が感じられないわけだな。かなりのてだれとみえる。だが、人に私は殺せぬだろう。私はあまりにも強くなりすぎてしまった」
「人に倒せぬ人などありはせんよ。慢心したなガルド・イニエーブ」
スモークはそう言って銃をイニエーブの腹の部分に向けた。
「ほう。私の弱点を知っているわけか。どうやらゴルディーザがいっていたことは真実だったようだな。今、我ら法外の五貴族に敵対する者たちが、大きくなりつつあるということか。だがな私を倒すには腹の核の部分を寸分も違わず打ち抜く必要があるのだ。それこそ寸分もね」
「私の眼に見覚えはないか？イニエーブ」
スモークの眼は真っ赤な色に変じ始めた。
「それは・・・赤化眼！！まさか、あの男が生きていただと？」
電子音のような奇妙な声は人の驚愕とは違ったが、私は確かにその中に驚きを感じた気がした。真っ赤な眼のスモークの言葉はさらに続く。
「そう。お前を改造した『あの男』だよ。正確にいうならば、私の方が先に改造されたようだがね。機械人間一号といったところだろうか」
「ふん。ずいぶん人間らしい機械人間だな。もっとも私は無理に人間を装ってはいないだけだがな」
「変装の名人の理由はあらかた予想はつく。元の体が心臓と脳だけではあらゆる変装術を駆使できるだろうさ」

「ふん。兄弟が再開したといったところか。だが、生憎私はそんなセンチメンタルな感情などとうに捨てている」
初めて、イニエーブは自ら動いた。スモークが動くに値する相手と思ったらしい。凄まじい加速力とともに空気を切り裂き、イニエーブの体が向かってくる。
「おやっさん！！」
ジョベルジアは思わず叫んだ。

一章ガルド・イニエーブ<23>終

ガキン。金属と金属のぶつかり合う音がする。私の視力では二人の動きの全ては追えなかった。ただ、うっすらと動く影が見えるだけだった。イニエーブのシルクハットがひらりと宙に舞い、地面に落ちた。小麦の近くで二人が動いたために、あたりに粉が飛び散った。その粉が二人の力を高めるように働いたのか、戦いは数十分にわたって続いた。私とジョベルジア、ガゼルはただ、次元の違う戦いを見ているしかできなかった。

ふと、一人の動きが止まった。スモークだった。ついに力尽きたかと、私たちは息をのんだ。だが、次の瞬間、大きな轟音とともに、スモークの体が吹っ飛んだ。イニエーブらしきものは燃え盛る炎に包まれた。同時に小麦も炎に包まれた。スモークは苦しそうに壁に打ちつけられた己の体を起こそうとして、起こせない。起こそうとする。起こせない。3度目でやっと、起こせた。しかし、足元がふらついている。私は燃え盛るイニエーブと小麦を見ながら言った。

「終わったのか？」

スモークの傷ついた顔は微塵の笑いもなかった。

「まだ、始まったばかりだ。だが、とりあえずは終わった。終わったよ。坊や」

ガルド・イニエーブは死んだ。そして、スモークの体も傷ついた。もはや、ジョベルジアとガゼルが肩を貸していないと立っていられない。

監獄島を脱出した私たちはイニエーブの野望の巣窟を後にした。

「そういえば、おやっさん。口走っていた、記憶の中の人って誰だい？」

「妻だ。ずいぶん昔に亡くした。それだけだ」

アッシュは痛い程わかった。スモークの悲しみが、無念が、それは自らも体験したことだからこそ。恐らく、ジョベルジア、ガゼル

も似た境遇なのかもしれない。皆、法外の貴族に恨みを持っている。
私は、不思議と彼らの上司に会ってみる気になった。法外の貴族は私の想像を遥かに超えた人間、いや、生物だった。私のやり方では復讐は叶わないかもしれないのだ。私は帰りのヘリコプターの中でゆっくりと明瞭な発音で述べた。
「スモーク。私を法外の革命結社の上役と会わせてほしい」
「その言葉を待ってたぜ。坊や」
スモークは微かに笑った気がした。
私はスモーク、ジョベルジア、ガゼルの3人に連れられて、アーリア帝国の首都サンタアルベニアへ向かった。

第二章グライア・シンシアへ　つづく

二章グライア・シンシア＜1＞

サンタアルベニアは、アーリア帝国の首都だ。皇帝ラクシャ４世のポスターや写真がいたるところに貼りつけられている。鋼鉄で作られた町の建物はひどく、通気が悪そうながらも頑丈に建っていた。首都の中央に皇帝の住むアルナブラ宮殿があり、中央官庁も密集している。そこから北に数キロのところにある、赤い外観をしたホテルの一室をスモークにあてがわれ、私は連絡を待つ身となった。部屋はアーリア人気質なのか、雑然としていた。ゴミ箱には前の人が使ったらしいティッシュや、食物の容器が入れられていた。だが、そのようなゴミも気にならないくらい、この国のゴミ箱は大きかった。そして、部屋も広かった。スモークは私に、「別に一等室を取ったわけじゃない。部屋が広いのはこの国の文化だ」と言ったことを思い出した。確かに、部屋全体の広さも私の生まれ故郷のホテルの安ホテルとは比べ物にならない。スモークが嘘をついている可能性も考えたが、ホテルの廊下を歩く人の服装は、私とたいして身分は違わないようだった。皆カジュアルな服装をしていた。私はてっきり、本部のような所につれていかれるのかと思ったが、そうではないらしかった。私はもう、丸一日ここに留め置かれていた。ガゼルも隣の部屋に泊まっている。日常の中で見ると、割合魅力的な女性のようだった。最初感じた印象のとおりだった。だが、彼女は私に好意がないことは、はっきりしている。彼女が通訳のユレニア・マクマーシになりすまして、近づいてきたのも、私から情報を得るために違いなかった。ただ、それだけのことなのだ。もちろん、私も健康な若い男だし、女性とのロマンスなども考えないでもなかったが、全ては復讐の前には、小さなことだった。むしろ、ガゼルを利用して、法外の革命結社の情報を探ろうかとも考えたが、そこまで自らを貶めることはまだ、できなかった。

ガゼルは昨日の夜、部屋をノックして、私に書類を渡していった。

「グライア・シンシアの国の情報よ。もし、仲間になるならあなたにもみせておこうと思ってね」
「それは個人的判断でそうするのか？」
ガゼルは嘲笑した。
「まさか。スモークからの命令よ」
私は少し会話を楽しみたくなった。
「命令がなければ動けないのは真の組織人とはいえないんじゃないか？」
「もちろんよ。ただ規律を守らないと組織は成り立たないのもわかるわよね？坊や」
私は少し不機嫌になった。スモークから呼ばれるときも前々から引っ掛かっていたのだが、２６にもなって、坊や扱いとは馬鹿げている。それを自分より、年下らしき女性からも呼ばれたのだ。気分の良いはずがない。そんな私の表情を見て艶然と微笑むとガゼルは部屋を去った。

思い出して少し不快になりながらも、昨日渡された書類に私は目を通した。要約すると、以下のようになる。

二章グライア・シンシア＜2＞

グライア・シンシアはアトランティスの女王である。大西洋に浮かぶ巨大な島に忠実な同志とともに乗り込み、暴政をふるっていた時の王アンゴルモアを倒し、代わりに王位についたのが、始まりである。これは一般にグライア・シンシアの好きな花ひまわりからサンフラワー革命とよばれている。

グライア・シンシアの側近で有名なのは3人、革命時からの同志である親衛隊長エドワード・ジルゴスタ、グライアの身の回りの一切を取り仕切るパロワ・アーディング、そして民衆を導く、終身占星術長であるシトルマリル・ピクレナン。

世界の情勢はゲルマンを中心としたゲルマン同盟とアーリア帝国を中心としたアーリア連合、どちらにも組しない小国連合がある。アトランティスは第三の小国連合のリーダー的な国だった。ふたつの巨大連合の間でキャスティングボードを握って、なんとか平和を保ってきた。その間グライア・シンシアは部下を使って様々な事件を起こしたが、それらはどれも、大国のパワーバランスがどちらか一方に傾くことを避ける目的で行ったともいわれている。そのせいで、世界中にグライア・シンシアは熱心な2連合パワーバランス論者の仲間を持つといわれている。もし、本当に2連合が戦争になれば、多くの人命が失われるからだ。だが、一方で、グライア・シンシアの批判者は、シンシアが目的を偽って様々な犯罪に手を貸し、私利私欲を満たしたと言っている。真実は大国や小国の様々な思惑の中で闇に沈んでいる。

アトランティスで、莫大なエネルギーを持つ宇宙石を他国に輸出し、国民に恩恵を与えているため、国民の人気は絶大である。

一通り読み終わった時、もう時間は正午を少し超えたあたりだっ

た。改めて、グライア・シンシアを倒すには、一筋縄ではいかないだろうことを知ったが、決意は揺るがない。私の意志は固かった。昼に、ガゼルがやってきて、書類を読んだことを確認すると、私を食事に誘った。

「はやる気持ちはわかるわ。でも、私たちは多くの仲間とともに動いている。その仲間を危険にさらすような真似はしてはいけないわ。あなたもそのことを肝に銘じておきなさい」

私に諭すようにガゼルはミートソーススパゲッティを食べる手を少し止めて言った。ナポリタンの美味を味わいながら、私はたしかに焦っていた。スモークはいっこうに帰ってこないのだ。たかが、一日で、こんな状態になるとは、自分でも予想外だった。

「ガゼルはなぜ、この組織に入った？」

女は不快げに眉間に皺を寄せると、言葉を濁した。

「まあ、入り口は少し違うわ。でも、彼らを裁く決意はあなたと同じよ」

入り口とは、入った動機のことをいっているのか。それともどういった経緯で入ったのかをいっているのか。よくわからなかったが、後半の言葉は私を勇気づけた。二人はしばらく沈黙して食事をたいらげた。

ふと後ろに気配がしたと思うと、ジョベルジアが立っていた。

「待たせたな。さあ、いこうぜ。あの方に会いにな」

ガゼルにしよ、ジョベルジアにせ、人に会話を聞かれるのを恐れているらしかった。慎重な言い回しをした。それもそのはず相手は法外の貴族なのだ。立ち上がり、私たちは、ホテルの外に出た。外にはタクシーが待っていた。車体は緑色の目に優しい色をしていた。私たちは乗り込むと、ジョベルジアは行き先を告げた。

「アベニュー通り、１３５番地へ向かってくれ」

二章グライア・シンシア＜3＞

タクシー内では運転手の軽い世間話に適当に相槌を打ちながら、3人はお互いに対しては沈黙を守った。数十分すると目的地に着いたようだった。ジョベルジアがお金を払うと、タクシーはすぐに去っていった。

「ここから少し歩く。ついて来い」

背の高いジョベルジアが先頭に立って歩き出す。ガゼルと私はその影を踏むように南に向かう。ジョベルジアが歩を止めたとき、目の前には古い館が建っていた。

少し緊張しながら建物に入ると、中は思いのほか明るかった。階段を上り、2階に向かう。絨毯の上を3対の足が連なって、移動する。2階の廊下を進むと奥に大きな扉があった。ジョベルジアはノックすると、「失礼します」と言って中に入り、私に中に入るように促した。まず視界に飛び込んできたのは、赤い仮面を被った男の姿だった。仮面の内から鋭い目で射抜かれた。

「君がアッシュ君か、ようこそ法外の革命結社へ。ずいぶん待たせてしまったようだね。君は不思議に思っている。こんな狭い所、みすぼらしい所が法外の革命結社の本部なのか？とね。君の予感は正しい。ここは、急場にこしらえた場所だよ。ただし盗聴器も、怪しい人間もいない。さびれた、廃墟といってもいい館だよ。そもそも本部はこの国にはないし、仲間でもない人間に教えるわけにはいかない。仲間内でさえ本部にいったことのある者は限られている。まあそれより、君はどうしたいのだね？」

「まずあなたの名前を聞こう。話はそれからだ」

かなり、革命結社の上位にいるだろう男に対して、臆するわけにはいかない。ジョベルジアが非難の視線を向けたが無視した。

仮面の男はわりと寛容な人物らしかった。穏やかに立ち上がり、

「これは失礼した。私は赤のシュナイルと呼ばれている。赤仮面と

も呼んでくれて構わないよ」
　と言い、また座った。どうやら、少し足が悪いらしかった。立った時に微かに足が震えているのが見えた。だが、無表情な仮面の下からは如何なる感情も読みとれない。
「ご存知のとおり、アッシュ。アッシュ・クロフォードといいます。シュナイルさん。私はあなたたちの組織に是非とも入りたいと考えています」
　落ち着いたいい声が腹から出た。組織が私を葬ろうと思えばわけもなかっただろうが、その恐怖を隠し、役に立つに足る人物を精一杯演出してみせた。大事なのは役に立つ男と相手に思わせることなのだ。
「いい度胸だね。アッシュ君。気に入ったよ。もし、君が私たちの組織に依存するような復讐者だったら、そんな人間はいらないというところだった。入社を認めよう。だが、赤のシュナイルは表面的な人間の態度というものを信じない。君の深層心理を探らせてもらう」
　そういって、シュナイルは私の脇に立つ、二人に目で合図した。二人は腕を取って私を動けなくした。
「何をする。ジョベルジア。ガゼル」
　私は戸惑った。二人の力は強く、シュナイルの前まで引き出された。仮面の男は私の額に手をあてた。その瞬間意識は途切れた。

二章グライア・シンシア＜４＞

目覚めたとき、館の部屋には誰もいなかった。明らかな、違和感を脳に抱えながら、起き上がった。ふらつく足取りの先には扉があった。扉？私はどこにいこうというのだろうか。扉の先には何があるというのだろうか。扉のノブに手をかけようとしたとき、赤銅色のドアが音をたてて向こうから開いた。ガゼルだった。だが、以前のガゼルではなかった。それは私の感じ方の問題だろうと思った。外見上ガゼルに変わったところは見出せなかった。ただ、なにやらガゼルの胸の中に味方である証めいたものが備わっているのを感じることができた。

「ガゼル。私の体に何をした」

ガゼルは少し気の毒そうな目でこちらを見た。

「おめでとう。あなたは名実ともに我々の仲間になったのよ。体はその証拠。私たちは、皆シュナイルによって力を与えられた存在なのよ。けれど、その代償として、魂の自由を失うのだけど……」

「魂の自由だと？何を言っている。きちんと説明しろ」

「今にわかるわ」

ガゼルはさらに語る気はないようだった。

また扉が開いた。ジョベルジアだった。やはり、この男にもガゼルと同じ、信号のようなものを感じた。脳に直接響くようだった。

ジョベルジアはガゼルのほうをみると、悲しそうに眉をひそめた。

「おやっさんは再起不能だそうだ。もう体のあちこちにガタがきてやがったんだな。もう一人では動けない体になってしまった」

「そう。スモークはこれからどうするのかしら。アルミナスの力でもダメなの？」

「おやっさんは元々、体のあちこちを改造していたからな。寂しいが一線からはリタイアだ」

スモークがもはや私達と共に戦うことはないと二人の会話からは

知れた。命を救ってもらった恩人であり、一番信頼していた男を失うのは痛かった。ジョベルジアはこっちを向くと怒った表情をした。
「アッシュ。お前は俺たち『法外の革命結社』の実働部隊となる。つまり、法外の貴族の命を奪う最前線に立つんだ。そして、俺が一番気にいらないことに、お前がおやっさんの跡を継げっていう命令がきた。もっとも俺らはこれから3人、アトランティスに乗り込むことになるんだがな」
「そうか。アトランティスにか」
私は静かな声でつぶやいた。しかし、同時に疑問が浮かんだ。
「どうやって、行くんだ？」
「声に命じるままに動くんだ」
ジョベルジアは短く答えた。
「声？」
その時、私の頭の中に声が響いた。
（（アッシュ…。アッシュ…。））

二章グライア・シンシア＜5＞

（（アッシュ。私は法外の革命結社のリーダー。皆は灰色の男と呼ぶ。私との会話に声は必要ない。今の君なら、私との会話の方法を知っているはずだ。））

確かに不思議と男と会話することが苦もなくできた。脳内での会話とは何とも変わったものだ。

『いったい私の体に何をした。灰色の男！！』

（（君は少し礼儀を知る必要があるようだな））

どこからともなく、痛みが脳にやってきた。

「う……」

片膝をついて崩れ落ちた。心配そうにガゼルとジョベルジアが一歩前に踏み出した。

「アッシュ。その方に逆らうんじゃないぜ。地獄だぜ」

ジョベルジアが忠告した。

（（今の君は私の思い通りの人形に過ぎない。おっと今さら後悔しても遅いぞ。我々は裏切り者を出さない。何故なら、裏切った瞬間に死んでいるからだ））

『わかった。法外の貴族に復讐できさえすればそれでいい』

大粒の汗を出し痛みに耐えながらなんとか声を脳に向けて絞り出した。実にやっかいなことになってしまった。法外の革命結社を甘くみていたらしい。その声は愉快そうに響いた。

（（ふん。いいだろう。とりあえず、今回は指令を伝えることが重要だからな。何も君を怖がらせようというのじゃない。3日後、ポート・ド・アーリアに向かい、そこからアトランティスに入国するのだ。必要な物はそろえておく。健闘を祈る。いいか。君の代わりはいくらでもいる。そのことを忘れないことだ））

こうして、声は遠ざかっていった。

「ポート・ド・アーリアね」

「ああ。3日後だな」
ガゼルとジョベルジアが言った。
「ああ。そうだな。それまで自由行動をとらせてもらう」
時間が必要だった。そして、残った家族。特にサニチェエートがどうなったかということが心配だった。二人は黙って私を見送った。
その日の夜、叔父に電話をかけた。
「ガルザニ叔父さん。叔母さんの調子はどうだい？」
「アッシュ。わざわざ心配してかけてくれたのか。そのことは万事解決したよ。ビルグ投資会社とはアッシュの会社だそうだね。何故いってくれなかったんだ。君の友人名乗る人が来て、万事お金の問題は解決したよ。アッシュが頼んでくれたんだろう？感謝するよ」
「叔父さん。私は・・・・・・」
一体何がどうなっているのだ？思わず言葉に詰まる。投資会社の人間に本名など少しも教えていないはずなのに。そうか。私はピンときた。法外の革命結社の仕業だろう。また声がした。
（（そのとおりだ。アッシュ。我々は鬼ではない。最低限のことはしてあげるつもりだ。ビルグ投資会社はもはや無用の長物だからね。こちらで処理させてもらったよ））
『どこまで人に干渉すれば気が済むんだ！！』
（（どこまでも。ふふふ））
笑い声は遠く小さくなっていった。
「アッシュ？アッシュどうした！！」
受話器の向こうから叔父の心配そうな声が聞こえる。
「ああ。叔父さん心配いらないよ。まあそういうことだよ。じゃあ元気で」
「また、いつでも帰ってこい。サニチェエートも待っている」
「ああ。じゃあ」
自分の無力さと、組織の力を知った。2日後、私はポート・ド・アーリアに向かった。

二章グライア・シンシア＜６＞

ポート・ド・アーリアはアーリア帝国の東海岸にある巨大な港湾都市だ。歩くと潮の香りが漂っていて、海を身近に体感する。声の命じるまま、歩いていくと、埠頭で見知った顔が現れる。ジョベルジアとガゼルだ。

「よう。アッシュ。ちゃんと来たな。待っていたぜ。準備は出来ている。すぐにアトランティスに向かおう。手はずは整っているぜ」

背の高い青年は手をあげてこっちだといわんばかりに、歩きだした。ガゼルも後を追う。私も後を追った。

いよいよアトランティスに乗り込むのだ。本来なら様々な雑事、ビザの取得、船の手配などを用意しなければならないのが、手間がいらなくなったのはありがたい。そして、協力者を得たことも。だが、私はここ2日意識の封じ込めを行うことを試してみた。つまり、灰色の男に気づかれずに思考するということだ。灰色の男も始終私を見張っているわけではなかっただけかもしれないが、ここ数日、私の思考を読みとった形の相手の声は聞こえなかった。意識の封じこめとは、思考を言語化するのではなく、感情的に思考することに他ならない。今私の組織に対して持っている感情は複雑だ。恩もあり、怨もある。そういえばガゼルが言っていた力を与えられた存在とはどういうことだろうか。謎はまだ多い。だが、生きるのだ。困難はこの復讐を思い立った時から、まったく変わっていないはずだ。

船は５０人程度の客が乗れる大きさだったが、他の客はいなかった。しばらくして、外海に出ると、船長と名乗る男が船酔いに苦しむ私に挨拶にきた。ジョベルジアとガゼルもそれぞれ広い船内で自分の時間を満喫している。

「アッシュさんですな。私は法外の革命結社の一員でして、船の管理を任されておりますトニー・ブラウンと申します。私の役目はあなたたちを運ぶことだけですが、良い航海をお届けできればいいと

思っております」
鼻の下に髭を蓄えた船長は優雅に慣れた様子でお辞儀をした。私はまだぐったりして答えられなかった。
「酔い止め薬を持ってこさせましょうか？」
「くそ。なんだって船で行かなければならないんだ。飛行機で行けばいいだろうに」
力の限り悪態をついてみる。だが、体調は変わらない。船長は哀れむように、「アトランティスは飛行機の離着陸はできません。濃い霧が常に上空を覆っているからです」と丸い錠剤を差し出した。
「すまない」
受け取ると、口に放り込む。船長は去っていった。それとともに少しずつよくなってきた。船内アナウンスが流れた。
「あと、3時間で、アトランティスにつきます」
船長以外は普通の船員らしかった。そう、革命結社の人間ばっかりがいるはずもないと思った。ガゼルが海を見つめる私に近づいてきた。
「上陸してからの作戦会議を始めましょう」

二章グライア・シンシア<7>

アトランティスについたのは夕方だった。船長から私たちは青いパスポートを身分証明書として渡された。アッシュ・クロフォードとそこには書かれてあった。これでは私の身元が特定されるのではないか？と思った。船長に尋ねると、厳しい表情で鼻を指でかきながら

「アトランティスは偽造を行うのが極めて難しい。皆本名を入れてある。大丈夫だ。入国したくらいでは、法外の貴族の敵対者とはみられないだろう。ただ、パスポートをみせるみせないは各自の判断ということだ。もっとも入国するときはみせなければならないのはやむをえないがな」

と言う。もしアッシュという男が法外の貴族を葬るために活動していて、実際、ガルド・イニエーブを倒す一助を成したと知れば、残った法外の貴族はどうでるであろうか？ただ、ガルド・イニエーブは個人的な恨みをかって殺されたと考えてくれるだろうか。まだ、一人なので、その可能性は多いにあるかもしれない。だが、二人、三人と消えていくと残った者たちはさすがに警戒するに違いない。そもそも、彼らの間に仲間意識や。連絡網があるのかさえ不明だが・・・・・・・・・。

アトランティスの入国管理官は皆太っていて、丸々としていた。空港を出て、道を歩くと、やはり、気のせいか皆太めの体型をしている。ここでは太っていることが美徳なのだろうか。陽気そうにジョベルジアは話しかけてきた。

「おい。アッシュ。皆太ってやがるだろう？ここではそれが当たり前なんだとよ。なんでもグライア・シンシアが自分より美しい女や男を許さないらしい。もっともただの噂だがな」

「昔ここにきたことがあるのか？ジョベルジア？」

「ああ。ずいぶん昔の話だがな。俺は元々ここの生まれだ」

「俺の両親はアトランティスに、いやグライア・シンシアに殺されたようなもんだからな」
「そうだったのか」
私は深くうなずいた。もっと詳しく話しを聞きたかったが、やめておいた。まだ、人生の深遠について話す関係ではないからだ。私たち三人は急いでバスに飛び乗った。

バスの窓から見るアトランティスの風景は驚きだった。貝を模った建物。魚のような格好をした車。あらゆるものは海に支配されていた。
「やけに、海と関わりの深いものが多いな……」
ぽつりと私がつぶやいたのを後ろの席のガゼルが聞いていたらしい。
「ここは９９パーセントの人が海神信仰だからね。熱心なお金持ちは神社に寄付したり、自らの建物を権威づけているのよ」
「グライア・シンシアが信仰されているわけではないのか」
「そうね。でも、グライアは海神の娘として万神殿に加わっているわ」
「万神殿？」
「アトランティスの神々を集めて祀った神殿よ。これから向かう首都アトティカにあるわ」
と、そこでジョベルジアがガゼルの隣から口をはさむ。
「ちょうど明日は誕生祭だな。グライア・シンシアの顔を拝みにいくとするか」
「ついたわよ」
ガゼルの高い声が響く。
私たちはアトティカのシーサーペンル停留所で降りると、協力者の待つ家の住所へ向かった。

二章グライア・シンシア＜８＞

ランフルニア番地４３－６。そこに協力者の住む家があった。ジョベルジアが呼び鈴を鳴らす。すると、中から４０代くらいの女性が出てきた。彼女の耳元でガゼルが何事かを囁いた。女性は激しく身を震わすと、「少々お待ちください」と言って、家に戻っていった。

「おい。ガゼル。合言葉はちゃんと伝えたんだろうな」

ジョベルジアは乱暴にガゼルに問いただす。ガゼルは少し眉を上げると、抗弁する。

「もちろんよ。ちょっと家に入っただけじゃないの。何を一々心配しているのよ。相変わらず器の小さい男ね」

「なんだと。ガゼル。それはいっちゃならねえセリフだぜ」

今にも掴みかからんとするジョベルジアの腕を取ると、私はしっかりと意思の通った声でジョベルジアを諌めた。

「落ち着けジョベルジア。時と場所を考えろ」

軽く舌打ちするとジョベルジアは黙った。二人は時たま、こうした衝突を起こすらしい。ジョベルジアの血気盛んな性格とガゼルの冷静沈着さは火に油を注ぐものだったのかもしれない。何か二人の間に感情的なしこりを残す出来事があったのかもしれないが、今はまだわからない。

すると、ガゼルは何事かに耳を澄ませるように目を閉じた。不思議な感覚だ。ガゼルの中にオーラとでもいうべきものを感じる。まるで、過去の偉人に出会ったときのような畏怖の気持ちだった。ジョベルジアがアッシュにそっと囁く。

「ガゼルの耳は離れた空間の音を認識できる。もちろん気をつけないと鼓膜をやられちまうがな。今、さっきの女が何を主人に話しているか聞いているんだろうぜ」

私は驚いた。この華奢な女性にそんな能力が備わっているなど半

信半疑だった。彼女は目を開くと私たちに告げた。
「大丈夫。さっきのおばさんは召使みたいね。すぐ主人である協力者ランズベルクが降りてくるわ」
「そうか。アッシュに今お前の能力を教えていたところだ」
ジョベルジアは安心したように言った。お互いの能力に関する信頼関係はあるらしい。疑り深いジョベルジアが信じているようだった。
「そう。私たちは赤仮面のシュナイルによって力を与えられた者なのよ。あなたにもその力はあるはず。まだ、どんな力かは知らないけどね」
「超能力というわけか……」
私は頭の声を思い出して、憂鬱になった。あの頭に入られる感覚と痛みを思い出したからだ。
と、そこにドアが開き、ランズベルクらしき白髪の男性が現れた。年は５０～６０だろうか。私たちをじろじろ見ると、会釈した。
「ようこそ。アトランティスへ。みなさん」

二章グライア・シンシア＜9＞

応接間に通され、ランズベルクは三人に軽いお茶をふるまった。アルトゥール産の紅茶だと匂いでわかった。紅茶の中でも高級な一品だ。情報通り、この国の民は良い暮らしをしているらしい。だが、この男はグライア・シンシアに敵対するものだという、一体何が不満なのだろうか？

「ランズベルクさん。ご協力感謝します。我々がやつを倒すまでの間、適当な隠れ家を提供してくれるそうですね」

ガゼルが丁重に口を開いた。ランズベルクは無感動な目で、ガゼルを見た。

「既に手はずは整っている。しかし、警備の厳重なグライア・シンシアを如何にして、護衛の天才と呼ばれるエドワード・ジルゴスタから遠ざけるのだね？」

ジルゴスタは確かグライア・シンシアの親衛隊長である。身の回りの一切の警護を司さどる。しかし、私たちは既に計画を練っていた。だが、それを彼に知らせる必要もなかった。

「ランズベルクさん。ご心配には及びません。計画はできている、いや整っているといったほうがいいでしょう」

私はカップを口につけ、お茶をすすりながら言った。

「私の望みはグライア・シンシアの命だけだ。他の物は壊して欲しくない」

ランズベルクに突然愛国心が湧きあがりでもしたのだろうか？グライア・シンシア程の存在がいなくなれば、この国の混乱は疑いようもないだろう。私たちは三人ともそれを知っていた。

ジョベルジアは肩をすくめるような仕草をしている。ガゼルは優しく老人の正面を向き、

「少々の混乱には目をつぶっていただかないと目的に犠牲はつき物です。私たちも命をかけてやる以上、半端な気持ちではできません。

ただ、グライア・シンシア亡き後には、ランズベルクさんの出番なのではないでしょうか」
と手を握り言い含める。
老人はさらに計画を知りたがるそぶりはさすがに見せなかったが、何か言いたそうに口を動かした。ただ、何も口から言葉は出てこなかった。
私たちは広い屋敷を召使いのおばさんに案内されて、それぞれの部屋に案内された。隣あった3室だった。
おおまかな計画はこうだ。アトランティスは多くの豊かさの恩恵を受けている。しかし、一方召使いや、肉体労働をしたいという人々はアトランティスの民には変な物好きしかいなかった。つまり、多くの外国人労働者を雇うことが豊かさの源泉だったのだ。私たちが目をつけたのは、この外国人労働者の過激派組織キラー・ユニオンだ。
三人はキラー・ユニオンに接触するためにそれぞれ別行動を取った。
しばらくずっと三人でいたので、私は解放されたような気がした。情報が書き込まれた地図を片手に外国人労働者の集まる、夕方の酒場に向かった。ここで一杯やって、一日の疲れを取るのだろう。不満を忘れるのだろう。私が向かったのは数十人が入れる大きさの酒場だったが、中には期待に反して数人しかいなかった。とりあえず話しを聞いてみることにした。

二章グライア・シンシア<１０>

「俺は祖国シンシネアから出稼ぎにやってきたんだ。この国は確かに稼ぎがいいからな。ただし、労働環境は最悪だ。この国の人間たちは俺たちに感謝の一つもなく、まるで、汚いものを見る目で蔑んでいるんだ。奴らにとって俺たちは豊かさに巣食う寄生虫みたいなものなんだろうさ」

「しかし、デモはやりすぎじゃないかい？この国の女王はあのグライアだぜ」

「知ったことか。俺たちはただ、当たり前の扱いが受けたいだけだ。こんな水ばっかりで薄めたような酒でなく、うまい酒が飲みたいぜ」

「確かにな。物価が高くて、こんな給料じゃあ仕送る分にはいいが、ここではとても生活していけない。それと、知っているか？なんでも、俺たちの故郷にお金を送るのに税金がかかるそうだぜ。しかも、その金はどこに消えると思う？」

「さあな。グライアの世界への貢献のための金とでも言いたいのか？」

「なんでもグライアはどうやら、第三国連合をアーリア連合、ゲルマン連合どちらかの連合に吸収させる腹らしいぜ」

「あん？その話と金の話がどうつながるんでい？」

「戦争の準備だよ。ついに2大国が戦争をおっぱじめるらしいぜ」

「なんだって！！それは大変だな。この国ともおさらばしなくちゃいけないかもしれないぜ。しかし、数十年も大きな戦争がなかったのに突然起こるとは信じられないことだ。酔いもさめちまわあ」

「まあ、噂話だがよ。法外の貴族の一人が死んだらしいぜ。それで、こんな事態になったんだと」

「どういうことだい？さっぱりわからねえ」

「まあ、噂だよ。噂」

なんだって。法外の貴族の一人がいなくなったために戦争が起こ

るだって？馬鹿馬鹿しい。私は自分の席で一人酒を飲みながら、聞いていた。男たちのいうとおり、ここの酒は粗悪品だ。まるでいい味もしない。思い切って声をかけてみる。
「すまないが。少し話しを聞かせてほしい。デモにはどうやったら参加できるんだ？」
　男たちは目を見合わせると、聞かせるにはお金を払えと要求してきた。
「兄ちゃん。少しばかり、包んでくれねえとな」
「そうそう。みたところ旅行者みたいだな。大方、いい国のお坊ちゃんってとこだろう」
　ポケットから財布を出すと、男たちに少しばかりの金を渡した。男たちは喜んで、愛想よくなった。
「デモは明後日の昼の１２時からだぜ。参加するのはいいが、ふざけてんなら怪我するぜ。グライアもただ見ているわけはないからな」
「場所は？どこでやるんだ？」
「もちろん。サンフラワー通りだよ。革命の聖地だな。グライアのやつ怒りやがるぞ」
　アトランティスの民が敬愛するグライアを、まるで恐れることもなく、口にしているのに違和感を覚えないでもなかったが、それほど、アトランティス民と外国人労働者の溝は深いのだろう。情報を得た私は他の酒場にもいってみたが、特に新しい情報はなかった。男たちの言った、“明後日の１２時、サンフラワー通り”ということが裏付けられるだけだった。夜中１２時をまわったころ、ランズベルクの家に戻った。

二章グライア・シンシア<１１>

翌朝目覚めて、階下に降りていくと、朝食にベーコンと卵とパンが用意されていた。香ばしい匂いは、無条件に食欲を刺激した。召使いの女が「こちらへどうぞ」と言い、椅子を引いてくれた。お礼を言い、座るって良くみるとナイフとフォークがない。

「すまないが。ナイフとフォークがないようだが？」

私が言うと召使いは「ああ。そうでしたか。そちらの国のお人でしたか」と驚いた。なんなのだ？と少々小首をかしげながら、持ってこられた金製のフォークとナイフで、ぎこちなく慣れない手つきで食べる。何せ、金の食器などを使うのは生まれて初めてだったのだから。この国の人間はどうやってナイフとフォークを使わずにご飯を食べているのだろう？と気になったので、尋ねてみた。

「一体この国の人たちはどのようにご飯を食べているんだい？」

「私たちはそのまま食べています。手で」

「そうだったのか。とっくの昔に廃れた風習がまだこんなところに生き残っていたとは。それと君の名前は？」

召使の女は少し恥ずかしそうに

「ランシアといいます」

と答えた。

まだこの国のことを何も知らなかったのだと気づいたので、２，３の質問を彼女にぶつけてみた。サンフラワー通りへはどこへいくのか？とか彼女の生まれはどこか？などを。彼女は明快な道順を教えてくれた。どうやら、その通りには大きな食材店があり、そこで毎日主人に出す献立を考えているそうだ。生まれは予想通りアトランティスではなかった。だが、どこかはついに言うことはなかった。言いたくなかったのだろう。ここで一生を終えるつもりかもしれない。少し故郷を思い出した。故郷と一概にいっても、私の場合は二つある。１０歳までいた廃島イエローランド。そして、ガルザニ叔

父の住むトールキアだ。もちろん今の場合はトールキアをまず思い出した。だが、イエローランドもすぐに思い出した。緑の美しい樹木に溢れた場所だった。それが、あの日を境に……。さて、世間話もこのくらいにしよう。グライア・シンシアを裁くチャンスが迫っている。部屋に戻って、でかけようとするとノックの音がした。開けると、ガゼルだった。

「ジョベルジアがキラー・ユニオンに接触できたそうよ。今から一緒に行きましょう」

「早いな。わずか一日で見つかったのか。やつらは非合法組織なんだろう？」

ガゼルは微笑すると「たぶん、灰色の男から指令があったんじゃないかしら。あなたの大嫌いな人のね」と私の手を引き、外に連れ出そうとした。

「大丈夫だ。一人で歩ける」

心を見透かされたようで気分は良くなかったが、一瞬触れたガゼルの手は温かかった。

二章グライア・シンシア<12>

過激派外国人労働者権利是正労働組合。それがキラー・ユニオンの正式名称だ。道中、ガゼルに聞かされた。目的の場所に着くと、小さな倉庫を改造したような集会所でユニオンのメンバーたち数人が集まっていた。真っ黒に日焼けした肌をした、筋肉のたくましいタンクトップを着た男。赤い口紅を薄く塗った、ロングスカートの色白な女。そして、奥にはジョベルジアとなにやら話し合っている、知的な眼鏡をかけた、黒いみすぼらしい服を着た男。

私たちが入ってきたのに気づくと、タンクトップの男が寄ってくる。威圧感のある風貌をしている。

「何か用か？ここには何もないぜ」

すかさずガゼルが前に出る。

「あそこにいる男の連れよ」

とジョベルジアを指さす。

「ほう。あの男の……。なんでもリーダーと話がしたいらしいな。グライア・シンシアを倒すとか言っているとか。根性だけは、かってやるが三人に何ができる」

色黒の男は吐き捨てるように口をきいた。ガゼルが私を肘でつついた。打ち合わせ通りにやれということらしい。そこで、私は男に言った。

「そこで、あなたたちのお力をお借りしたいわけです」

「俺たちにとってもちゃんとうまみのある話なのだろうな」

「もちろんです。リーダーに話をさせてください」

「好きにしな」

と、そこに椅子に座っていた色白な女が口をはさむ。

「まちな。ローグ。この男たちは本当に信用できるのかしらね？覚悟の程を試してみたいわ」

ローグと男はいうらしい。ローグは女をティルミラージュと呼ん

だ。ぶつくさいっていたが、最終的にはローグは女に任せることにしたらしかった。
「今から、ローグと本気で戦ってみせてくれるかい？もちろん、兄ちゃんだけでいいさ」
馬鹿げている。私は思った。何故にこれから味方になろうというもの同士が争わねばならないのか、まったく理解できない。
「なんだって、そんなことを」
言いかけたところで、ガゼルが後を引き継いだ。
「もちろん。いいわよ。この人、みてくれは華奢だけど、強いわよ」
この女、なんということをいうのだ。私に取っ組みいをやれというのか。
「へえ。ローグはうちの組織一の力自慢だよ。いいね。ローグ」
ローグは困ったように、頭をかいた。
「本当にいいのか？そりゃ、俺はこんな時のためにいるわけだし、いつでも戦うがよ」
ガゼルが私に耳打ちをする。
「あなたの力を私もみたいわ。まだ覚醒していないみたいだし、ピンチになれば、でてくるはずよ。本能と私たちの力は関係しているのだから」
「まったく。もし、力がでなかったら、私は死ぬんじゃないだろうな」
「いざというときは助けるわよ。それにどっちみち力がでないときは、はっきりいって、法外の貴族と戦っても、無駄に命を落とすだけよ」
もっともだと思った私は「話は終わったかい？」と聞いてきたローグと向き合い、睨みあった。

二章グライア・シンシア<13>

ローグは喧嘩慣れしていた。しこたま顔を殴られ、腫れ上がった。攻撃はほとんどかわされた。あたっても彼はまったく意に介するそぶりもない。これが、私の実力なのだ。息巻いて、法外の貴族を倒すといいながら、一人では何もできない駄目人間。それが私だった。あげくの果てには、怪しげな組織により、精神の自由を失い、代わりに力を得たかに思えたが、それも幻想に過ぎなかったらしい。何も変わった現象が起こっている様子はない。もう立ち上がるのはよそう。もう無理だ。何度そう思ったことだろう。だが、私は立ち上がった。ローグに必死で向かっていった。何のために?復讐のために?いったい何度殴られただろう。顔はとっくの昔に腫れ上がっているはずだった。ジンジンと顔も腹も足も打たれたところあらゆるところが痛かった。だが、相手は殴るのをやめない。さらに、相手の表情は何故か恐怖に包まれている。

「お前……。不死身か」

ローグは呟いた。キラー・ユニオンのティルミラージュも唖然としている。たしかに、私の痛みは一定の痛みを持っていたし、殴られるたびに痛かったが、不思議と痛みはある程度を超えることは決してなかった。さらに、長く倒れていて、次に殴られるまでに時間があると痛みが合間に引いていくような錯覚に陥ることもあった。だんだん、ローグも殴り疲れて息が切れてきた。私はさらに立ち上がり向かっていった。ついに、ローグが折れた。拳を使いすぎて握れなくなったのだ。手は真っ赤に腫れ上がっている。

「もう。勘弁してくれ」

ガゼルもふらふらと立ち上がる私の肩に手をあてて、

「もういいわ。あなたの力もわかったわ。もうやめて」

時間とともに、体中の痛みはなくなっていった。ティルミラージュが奥に案内するように手招きした。

奥に座って、ジョベルジアと話していた眼鏡の男を彼女は紹介した。
「キラー・ユニオンのリーダー。バラトよ。バラト。お客さんよ」
バラトと呼ばれた男は立ち上がった。
「良く来たね。ジョベルジア君から話はある程度聞いているよ」
私たちはがっちり握手をした。
「君たちには悪いが協力はできない」
バラトははっきりと強く確かにそう言った。ジョベルジアめ。今まで何をしていたのだ。私は非難の眼をジョベルジアに向けたが、彼は手をあげてお手上げとするだけだった。
「今はデモだ。とりあえずデモを成功させなければならない。話しはそれからだ」
バラトは頭を抱えている。
「だからよ。そのデモの規模をもっとでかくして、宮殿に突っこもうぜって話なんだがな」
「ジョベルジア君。我々のデモの現在の参加人数はどれくらいだと思うね？」
「千人くらいか？」ジョベルジアの問いにバラトは首を振る。「五百人くらい？」また首を振る。「まさか百人？」またまた首を振る。そしてバラトは残酷な数字を告げる。「５０人だ」
目の前が真っ暗になった。殴られたよりも効いた。この人数ではどうしようもない。親衛隊のエドワード・ジルゴスタは出てこないだろう。宮殿にでも突入しない限り。だが、５０人ではどのみち無茶だった。すると、ガゼルが提案した。
「今から、新聞社にデモの呼びかけを載せてもらえないかしら？」

二章グライア・シンシア＜１３＞（後書き）

すいません　急遽、新たな執筆作業のため、またしばらく休ませていただきます。申し訳ありません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8021s/

アッシュ戦記

2011年7月2日03時21分発行